

上地の風 (第十二号)

ふるさと上地 8

岡崎市立上地小学校

上地の風 (第十二号)

ふるさと上地 8

岡崎市立上地小学校

はじめに

本年は、学区・学校創立十二周年にあたり、学区並びに関係者の皆様方のご協力を得ながら新たな気持ちで学校教育を進めることができました。

上地っ子風車「びゅー太君」は風に向かって元気に回り、その発電によって、なかよし池の水車も勢いよく回っています。コイも喜んでいるようです。

また、放し飼いのチャボ、ニワトリも子どもたちと仲良しになっています。

学区との連携を深め、郷土の歴史・文化・自然を大切にしていく伝統を受け継ぐと共に、生涯学習の基礎を培うべく読書指導に力を注いできました。

学区と学校をつなぐパイプ役として毎月「学校だより上地」を作成しお送りしておりますが、学区のみなさんからの学校によせる励まし、要望、資料提供も含め、その絆を一層強めてまいりたいと思います。

ここに本年度分を集約して『ふるさと上地第八集』を発行することができました。ご支援頂きました皆様にお礼申し上げます。一年一年を大切にしながら、さらに新しい一歩を進めたいと思います。今までと変わらぬご支援ご指導を心からお願い申し上げます。

平成七年二月

岡崎市立上地小学校長 深津 武司

目次

一、ふるさとシリーズ

- 一、「うなり石」伝説を追って……………1
- 二、上地の印象……………7
- 三、上地の土地の様子……………10
- 四、上地学区こどもの家……………16
- 五、命を捨てて戦友と潜水艦を救う(一)……………23
- 六、命を捨てて戦友と潜水艦を救う(二)……………30
- 七、新上地八景を歩く会……………35
- 八、上地八幡宮のお祭り……………41
- 九、小林さんをお迎えして……………45
- 十、柳川の源流を訪ねて……………49
- 十一、学級文化活動「ふるさと上地」から得たもの……………55

二、校長通信

- 一、いい顔・いい姿勢……………64
- 二、学校環境を思う……………66
- 三、生き生き上地っ子……………68

- 四、自分の目標を持つ……………70
- 五、やりぬいた時の喜びを……………72
- 六、本読めばワクワクドキン夢のジャングル……………74
- 七、みんなのためにひとりのために……………76
- 八、子どもと共に、子どもの心を……………78
- 九、イ年を迎えて……………80
- 十、学級文化の創造それぞれに花開く……………82

三、教室の窓

- 一、六年生の一か月……………84
- 二、みんなで心をひとつにして合奏したい……………89
- 三、力いっぱいがんばった上地っ子文化祭……………93
- 四、三年二組の朝……………98
- 五、運動会の日……………102
- 六、国体記念 一年生の運動会……………107
- 七、忘れられない修学旅行……………118
- 八、ぬし市仏壇店見学記……………125
- 九、学習発表会に向けてGO!……………129

「うなり石」の伝説を追って

（大正の初期から上地八幡宮境内に安置）

上地小学校 松原暁三

むかしの大谷坂は、大きい木がたくさん生えておって、昼でもうすぐらいところでした。ここを、細くてじめじめした吉良道（きらみち）が通っていました。ある年の秋、上地のごへえさは、馬頭（ばとう）の村のお祭りに行って夜おそく帰ってきました。お酒をよばれて一ぱいきげんで、鼻うたを歌いながら、やってきました。

ちょうど、峠にさしかかったころ、風がビューーと吹いてきて、ちようちんのがかりが、ぱっと消えてしまいました。

「ちえっ、これじゃあまっ暗で、鼻をつままれてもわからんなあ。よいもさめちまうなあ。」

と、言いながら、急ぎはじめました。そのとき、山の中で、

「ううー。ううー。」

と、女の人のうなる声が聞こえました。

「ひやー。お、お、おばけー。」

（嶋田稔前上地小校長作童話「うなり石」の一節より）

1、碑文「唸石」紹介

伝説の奇石

うなり いし
唸石

この奇石の源は知らず
夜陰深更に及び
神域寂として陰雲籠り
冷雨まさに来たらんとす
鳴唸暫し
里人旅人唸石とぞ唱え
子子相伝えて今に及ぶ

上地八幡宮境内の「唸石」碑文の全文です。ご承知のように、上地八幡宮は一一九〇年に源範頼により創立されたと伝えられ、上地地区住民の氏神さまとなっております。



上地八幡宮境内にまつられている「唸石」

2、上地八幡宮の大須賀宮司さんを訪ねて

冒頭に、上地小学校前校長嶋田稔先生の創作童話の1節を紹介しました。

この作品は、上地八区にお住居であった加藤信太郎氏（故人）を初め多くの学区内外古老に何度かお会いになり完成したものです。

そこで、本号では、「伝説の奇石」のいわれに、いま一歩近づこうと、四月も半ば、「唸石」碑文の原文を書かれた上地八幡宮の大須賀尚繁宮司さん（明治四十四年七月一日ご出生）をお訪ねしました。

八十三才という高齢にも拘らず、鮮明な記憶に基づいた歯切れのよいご対応に感激しました。

上地八幡宮西のJR踏切沿いのご自宅（上地町宮脇五十二番地）で、心温まるひとときを過ごさせて頂きました。

以下、氏のお話をもとに「唸石」の伝説を追ってみました。



伝説の「唸石」について語る大須賀宮司さん

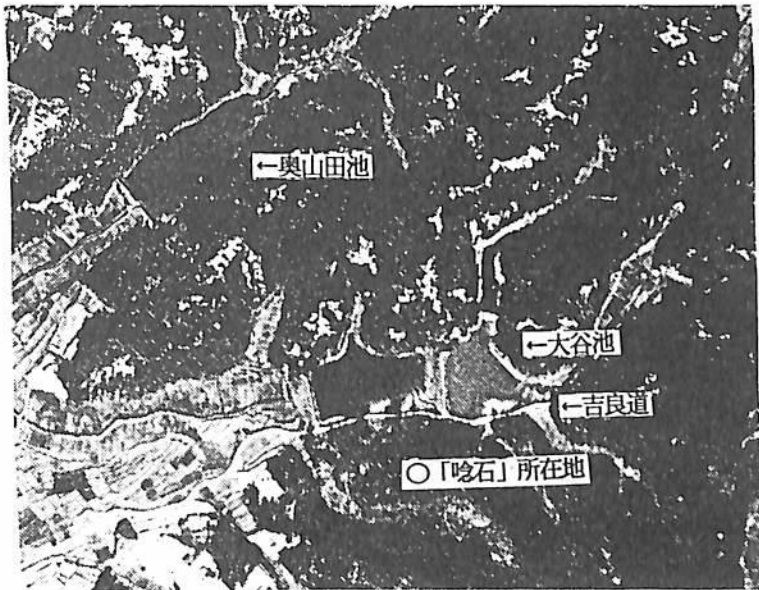
3、たきぎや塩を背負って吉良道を往来

「上地を通っていた吉良道です。この道は、呼び名とおり三河湾に面する吉良から三河の山間部へ通っていました。この道を通って吉良からは塩や海産物が、逆に三河山間部からは木材や米などが運ばれていたのです。」
これは、本校郷土読本「うえじ」十一ページの記述です。大谷公園と岡崎医療刑務所の間を通る「吉良道」について記したものです。

区画整理事業が完成した現在の上地学区を前提にしては予想もつかない、暗く寂しい山合いをぬっていた道です。

今から千年をさかのぼる歴史をもつ吉良道は、東へ向かえば馬頭をぬけて岡崎藤川の宿へ、西へ向かえば上地八幡宮から幡豆の吉良に通じる重要な道路でした。

吉良方面からは海産物が運ばれ、この上地からは山の産物である薪や落ち葉が東に西に運び出されて行きました。



区画整理事業前の上地地区航空写真

吉良道の南側には大谷の山が、北側には大蛇の伝説など数々の秘話が登場する大谷池が位置していました。宮司さんのお話によれば、上地の山から集めた松葉を背負って歩く人の姿が道を往来したということです。時代が進み明治の末期から大正にかけては、牛車や馬車が人力に代わって薪の運搬が盛んに行なっていました。
前ページの写真からも想像されますが、大谷池と大谷の山に囲まれた大谷坂付近の吉良道は、昼間でも暗く薄気味悪い所でした。

しずやま

4、「静山」から「うなり」声しずやま

当時は、現在の医療刑務所東の山を「静山」と呼んでいました。静山は、上地奉行職の早川家の所領となっていました。（早川家十二代目の早川博さん宅は、上地町下屋敷六十一番地にあります）

この吉良道に夕やみが近づく頃になると、静山の山頂付近から、風にのって人のうめき声や動物のうなり声にも似た何とも気味の悪い声が聞こえてきます。こんなことがあって、いつのころか、上地の村人たちは、そろって山頂を目指して「声」の主を探して歩きました。そこで発見したのが、山肌に突き出ていた一抱えもありそうな数個の石でした。この石を村人たちは「唸石」と命名したのです。

「暗く寂しい山中の街道でもあり、時として追いはぎが出没したりしたので上地村の人たちは、日没後や雨降りなどは用心して近づかないようにしていました。」

「これは当時の上地の人たちの知恵でしょうね。こうして、お互いの安全を守り、旅人たちにも夜間の吉良道往来に用心を喚起しようと唸石伝説を作り出したのではないのでしょうか。」

自らが見聞きした事実をもとに語られる大須賀宮司さんのお話には、一段と強い説得力を感じます。

5、村人たちが上地八幡宮に安置

山頂付近で発見された「うなる」石は、早川家の承諾を得て、信心深い村人たちの手で氏神様でもある上地八幡宮に運び込まれました。宮司さんが幼少の頃ということですので、大正初期のことと推測されます。こうして境内に持ちもまれた「唸石」の碑文は、半世紀の時を経て昭和の終わりに設置されました。宮司さんご自身の原稿を専門業者の手で写し取ったものです。それが本文冒頭で紹介した碑文です。

「私は土呂八幡宮で生まれたので上地のことについては余り詳しくないですが、唸石のことはよく覚えていました。今でも、時折、上地八幡宮を訪ねて下さる人が唸石に合掌している姿を見て嬉しくなります。誠に恥ずかしい内容の碑文ですが、上地の伝説を後世にできる限り正確に伝えていきたい一念から書きました。区画整理事業が立派に完成した今の上地を目の前にして、当時の吉良道とうなり石を思い出すと、まさに隔世の感がします。」

遠い昔の記憶をたどりながら、宮司さんのお話は続きました。

そして、今、平成六年の春。

大谷池に吹き上がる噴水「平成の泉」近くの遊園地で憩う親子連れ。「大谷池のへらぶなは型がいい」と釣りを楽しむ釣り師たち。「伝説」の吉良道を走り抜けるトラックのエンジン音。街路灯に照らし出された夜の吉良道。いずれもが、「静山」の唸石伝説を想像もさせない変貌ぶりです。往時を偲びながら、「里人旅人」や「子子相伝えて今に及」ばせてきた上地の先人たちに思いを馳せつつ「唸石」を終わります。

上地の印象

岡崎医療刑務所 庶務課長

江越 洋行 さんに聞く

上地十区に岡崎医療刑務所があります。刑務所に勤務する職員の方は、転勤が非常に多いと聞いております。

原稿をお願いした江越さんも全国各地の刑務所に勤務し、昨年四月に七番目の任地として岡崎医療刑務所に勤めることになったとのこと。上地の地で一年余を過ごされた江越さんに上地の印象について寄稿して頂きました。

江越さんの文を紹介する前に、岡崎医療刑務所について、簡単に紹介したいと思います。平成元年三月発行の「続ふるさと上地」の「岡崎医療刑務所を訪ねて」の中から抜粋して紹介します。

昭和三十三年 移転候補地として岡崎市上地町字小田ヶ入一が決定。

昭和三十三年 移転のため現在地の整地工事が開始された。

昭和三十七年 工事完了し、名古屋刑務所岡崎医療刑務支所と改称。名古屋、大阪両管区内各刑務所の精神障害者を集禁、医療行刑を再開した。

昭和四十六年 岡崎医療刑務所が設置された。

平成六年度 職員数一一〇名 収容者数二〇〇名

平成四年十二月のある日の午後、その日は娘の進学の子面談の日でした。

出かけようと玄関で靴を履いた時、電話が鳴りました。電話に出ると知人から私の転勤の知らせでした。それは翌年の四月に岡崎に転勤という内容であり、翌年三月に高校を卒業する娘の進学先を決めるのに首を長くして待っていたものでした。

転勤族にとって子供の教育は頭の痛い問題であり、当時は名古屋市内に妻と娘を残して、福井で単身赴任中であり、次の転勤は、家族と一緒に生活できるように愛知県内への転勤を希望していたので、希望通りの転勤となり、内心とても喜んだものでした。転勤は引越越しを伴うので、引越越しの煩わしさから年々ともにおっくうになってくるものです。しかし、今回ほど苦にならない転勤は、初めてであり、うれしくなって早速地図を買ってきたりして岡崎について勉強をしたほどです。その学習効果がきめんに現れて、四月三日の引越越しの当日も道を間違えることなく新居に到着し、その日から上地の住民としてお世話になることになりました。

私の今日までの二十一年間は転勤の連続で、静岡を皮切りに浜松、栃木、岐阜、名古屋、福井、そして岡崎と当地が七か所目で、ほぼ三年に一回の割合で転勤しておりますので、転勤族の目に上地がどのように映ったかを書いてみました。

まず、新居に落ち着いての第一印象は、回りに緑が多く、すいぶんと自然が残っている町ではあるが、買い物などの便利な暮らしやすい町というのが最初の印象でした。

確かに栃木も避暑地で有名な那須の御用邸が近くにあり、夏はクーラーも不用なくらい涼しい土地であり、しかも自然に恵まれた土地でした。自然に恵まれ過ぎて、葉書一枚を買いに行くにも、車で十キロも走らないと郵便局がないというようなところでした。娘の通っていた小学校も全校児童二二〇人という山の中の学校でした。自然に親しむというより生活が不便とい

うのが強く印象に残っています。

上地は、生活しやすく、しかも周りに緑がたくさんあるので、良いところへ転勤させて頂いたと喜んでいました。

上地にお世話になって一年が過ぎ、上地の土地柄がわかるに当たって、全国から転勤してきて、上地を第二のふるさととして、当地で家建てて永住する人が多いと聞き、なるほど納得しました。定年後に永住する地をまだ決めてない私も、退職後は上地に住みたいと考えるようになってきたのが最近の心境です。

大変気に入っている上地の中で、私が特に気に入っているのは、新上地八景にも紹介されている大谷公園です。雑木林を上手に残しながら近代的に整備された公園であり、整備に携わった人たちに敬意を表したいと思います。

大谷池でカルガモなどの野鳥が羽を休めている姿を見るとほっとするものがあります。

上地の良さをいろいろ書きましたが、更につけ加えてみますと、上地の人の人情味あふれるところではないでしょうか。いろいろな地方を転勤して回っていると、不思議とその地方の人情というものがすぐにわかります。これは長年の勤といえますか、その地方で一か月も生活すれば不思議とわかるようになってくるものです。

こんな町は一日も早く転勤したいと思いたくなるような土地柄の地方もあります。私の六回の転勤の中で、こんなに温かく迎えてくれたところはありません。こんなところも私が上地を気に入っている点のひとつです。

上地についていろいろと印象を蓄きましたが生活が便利という点だけを見れば、確かに上地より便利などころもありましたが、自然環境、人情、生活の便利さ等々総合的に見ると上地は文句なく最高点がつけられます。

今後、一人でも多くの人が、上地の住民となるよう、一層魅力あふれる町にしたいものです。

上地の土地のようす

上地区の位置

上地区の土地はどのようなふうになっているのでしょうか。私たちはどのような土地の上で生活しているのでしょうか。少し広く考えてみますと、岡崎市は三河山地の西の端と岡崎平野の東の端とが接する地域にあたっているといえます。三河山地とは、海拔千メートルを越す北設楽郡の段戸山地から南の岡崎方面へ向かって少しづつ高度を落として、幸田の遠望峰山にある三河湾スカイラインの方へ連なっている山地です。上地区は三河山地の南の端の西側に位置しているといえます。岡崎平野とは、矢作川の流域に広がる平野のことです。岡崎の土地の作りは矢作川と切っても切れない関係にある訳です。主に、三河山地から川の働きによって運び出された砂や泥・礫（石ころ）によって岡崎平野が作られているわけです。

三河山地と岡崎平野という言葉が出てきましたね。山地と平野の他に地形を表す言葉は他にもたくさんあります。扇状地、段丘、三角州、……。わたしたちの上地はどのような所なのでしょう。

住みやすい地形

さて、全国で大きな町の発達しているところを見てみますと、どこも大きな川が流れている平野にあります。東京・名古屋・大阪・北九州などいずれも大きな川が流れている平野にあります。これには何か理由がありそうですね。縄文時代や、弥生時代の遺跡を調べてみると、全国的に中位段丘面という同じような条件の所にあります。沖積面とよばれる所は、その時代の川が運んできた砂や石などの積もった所で一番低い土地に当たります。こういう所は、作物を作るには適していますが水害の恐れも多分にあるわけです。その点、中位段丘は、川の水が近くにあり、じめじめしていないので住むにはとても条件がいいわけです。全国的に、縄文時代や、弥生時代の遺跡が中位段丘面に多いのもこんな理由があるわけです。大昔の人々の生活のしやすい場所が、集落となり、都市へと発展していったと思われまます。さて、岡崎市内の遺跡の場所を見てみますと、六年生が

遠足で訪れた村上遺跡を含めて真宮遺跡（六名）・於御所遺跡（岩津）などもやはり中位段丘面の上にあります。この中位段丘は、岡崎では主に矢作川の働きでできたものです。

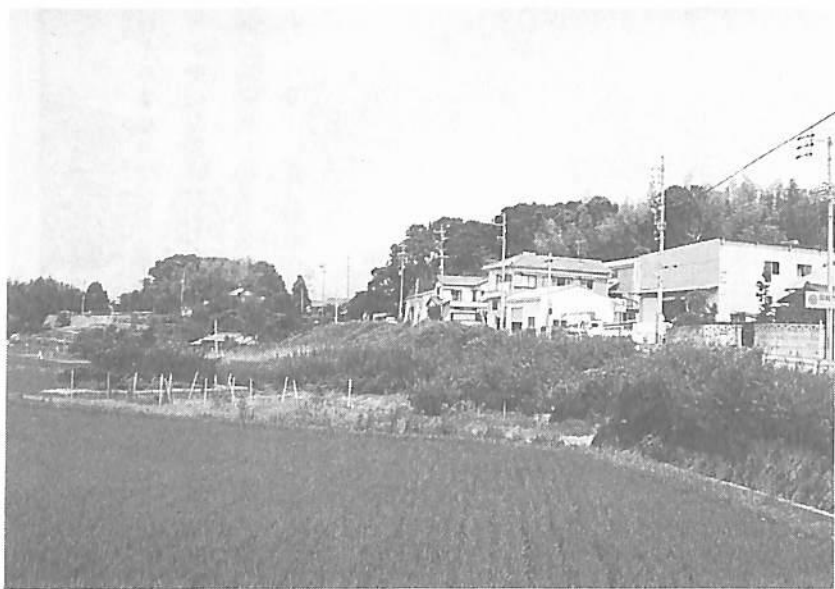
上地四区方面の高位段丘

それでは、上地の土地の様子を南の方から見ていきましょう。

幸田町坂崎の水田地帯から上地4区の方へ上ってくる道（旧二四八）があります。柳川の橋を渡って青山材木店、三善寺の前を西の方へ向かっていきます。なだらかな坂になっていて三善寺を過ぎたあたりから平坦になると思います。

坂崎の水田地帯は、現在の矢作川が運んできた砂などでできている一番新しい沖積層といわれる平坦な面です。そこから坂を上った上地4区あたりは、沖積面より上の面であることが良くわかります。この一段上の面は、先に述べた中位段丘面の上の高位段丘と呼ばれるものです。その証拠は捜してみましよう。

三善寺近くのがけの様子見てみると、砂や石ころ（礫）が見られます。これらは、礫の種類、丸っこい様子など古い時代の矢作川が運んできたもので、岡崎市に分布している高位段丘面を構成する地層と同じものなのです。この面は北の方に向かって上地八幡、エールボール、北西方向に福岡町の御坊山の方へつながって



幸田町坂崎の水田（沖積層）から上地4区方面（高位段丘）を望む

います。北東方向の上地五区にもこの面が観察されます。

ドミール付近の中段段丘

旧二四八からドミール上地店の方へ右折して衣浦線の方向に目を向けてみましょう。ドミール上地店付近は、先程の旧二四八の面より下がっていることがわかると思われます。また、旧二四八のサッチモの交差点からドミール上地店の方向に歩いていくと、少しずつ下がっていくことがわかると思われます。衣浦線に沿って先程の高位段丘面より低い中段段丘面があります。この中段段丘面は、岡崎の中心部、康生町、伝馬通りのある面と同じものです。今度は、衣浦線から離れて郵便局の方へ足を向けてみます。

集合農地の沖積層

郵便局から前田公園の西を通ってオカリヨウの方向には緩やかな坂となつて少しずつ下がっていき前田公園の西あたりは水田が広がっています。上地土地区画整理の時、集合農地として水田が残された所です。この辺り一帯は、郵便局あたりより一段低い面で、沖積層の面です。この一番低い（新しい）地層の面は集合農地、オカリヨウ、南公園の南側の水田、そして谷筋のように大谷池の方へと伸びています。

矢作川の堆積物でない土地

さて、今まで見てきたのは、一番低い沖積層の面、中段段丘の面、高位段丘の面です。そのほかの所に目を向けてみましょう。

上地小学校の北の若松東、東の勤労福祉会館方面（上地九区、十区）はこれまで見てきた沖積層、中段段丘、高位段丘というような、矢作川の堆積物からなる地層からできている土地とは違うようです。この辺りは、上地土地区画整理事業が始まる前までは山でした。その名残が現在大谷公園に残されている雑木林です。大谷公園の山のような地形が竜南中学校の方へと連なっていたわけです。山を削って造成されたこれらの地区も少しずつ土地の様子が違うようです。

花崗岩地帯

上地小学校も丘陵地を削り平坦にした土地です。学校の東の市民ホームとの間は崖になっています。ここは、基盤の岩石である花崗岩が観察されます。これと同じような花崗岩は、若松東一帯にも見られます。これらは中粒黒雲母花崗岩と呼ばれているものです。若松保育園の法面には基盤の風化した花崗岩が露出しており観察することができます。

南公園の東側の駐車場の所では、基盤の花崗岩が観察されます。この花崗岩は、中粒白雲母花崗岩といわれるものです。同じ花崗岩でも少し構成鉱物の種類が違います。この花崗岩は南公園



若松保育園の花崗岩の露頭



集合農地から大谷池方面を望む

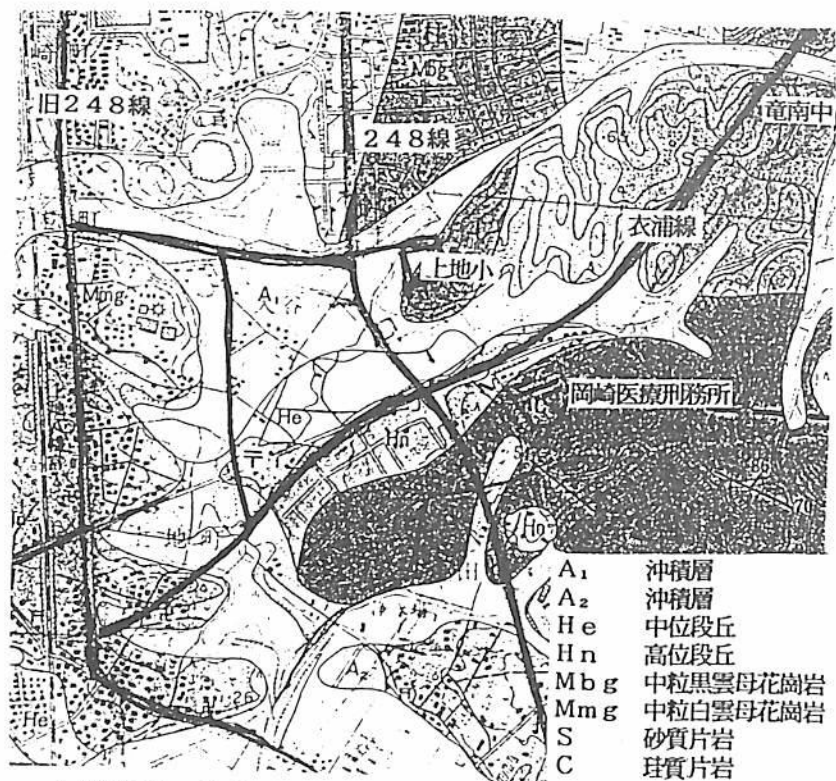
の南側に沖積層をはさんで東海金属の工場のある高台にも見られます。
領家変成岩類地帯

勤労福祉会館から竜南中方面にむけても大規模な工事が行われ宅地が造成された地域です。ここも基盤の岩石が観察されますが、上地小学校、若松東一帯とは、少し様子が違います。この辺りは領家変成岩類とよばれる岩石の、砂質片岩でできています。竜南中学校開校当時に体育館の回りに木植（むくげ）やあじさいを植えたことがあります。ほんの少し掘ると、基盤の砂質片岩の固い部分が出てきてとても苦労したことを思い出します。また竜南中学校の南東角の崖に、この砂質片岩が観察されます。

大谷池を境にして南側は今でも雑木林の山が連なっています。

その山の北の縁に岡崎医療刑務所があります。医療刑務所のすぐ東側には出雲殿の事務所と工場、そして上地配水場があります。この辺り一帯も領家変成岩類でできていますが、大谷池をはさんだ北側と異なりこちら側は珪質片岩でできています。

上地学区の土地の様子をかけ足でめぐってみました。道のあちこちで崖になっている所があります。そこに含まれている所があります。そこに含まれている所があります。また、学区を歩いてみると、自然にできたや石ころ（礫）を調べてみると、その種類、量などが地域によって違ってきます。また、学区を歩いてみると、自然にできた平坦面も高さの違う面があることに気づくと思います。私たちの住んでいる上地の土地の様子に興味を持ってみてください。



上地学区の地質図（新編岡崎市史 自然14抜刷 より）

* 新編岡崎市史の自然編には、地質のほか植物・動物・気候など詳しい資料が掲載されています。ぜひ読んで下さい。



竜南中学校の南東角にある砂質片岩の露頭

上地小の子供たちが、いつもお世話になっている「上地学区こどもの家」について、こどもの家指導員藪田先生に寄稿して頂きました。一年四組の子供たちは生活力の勉強で、こどもの家へ出かけ藪田先生にこま回しを教えてもらいました。いまでは、クラス全員の子が上手にこまを回せるようになりました。その他、こどもの家の図書室を良く利用している子どもたくさんいます。いろいろな面でお世話になっているわけです。

上地学区こどもの家

上地学区こどもの家指導員 藪田 篤夫

「上地学区こどもの家」は地域の大人とのふれあいの中で、子供の健全な育成をねらい、学校から帰った子供の遊び場と、地域住民の健康づくりの拠点として建設されました。

昭和六十一年度に、井田、城南学区に最初の二館が開設され、次いで昭和六十二年度には、上地、本宿、広幡学区に立てられました。以後毎年数館が建設され、平成五年度に、三島、恵田学区の二館の開設により、市内四十一学区全部にこどもの家が設置されました。岡崎市が八年の歳月と多大な建設費をかけた一大事業でした。他の市には見られない施設で、岡崎市がいかに、子供の育成に力を入れているか知ることができます。

建物は、いずれも鉄骨平屋建てで約五百平方メートル。バレーボール、ミニバスケット、インディアカ各二面、バトミントンが三面とれる広さ、約四百平方メートルのレクリエーション室(体育室)と造形室(図書室)、事務室、体育倉庫があります。

体育室には、卓球台二台、トランポリン(低学年用)一台、すもうマット、小マット各一枚が常備されています。

図書室には、工作台と、工作腰かけ、約千二百冊の本と雑誌があります。これらの本の大多数は、学区の皆様のお贈りによるものです。平成三年に、エアコンが取り付けられ、子供たちは、快適な読書、ゲーム遊びができます。

事務室には、オセロ、将棋、ぐるぐる、輪投げ等の遊具があります。いろいろなコマ五十個、けん玉十組、羽子板二組は、伝承

遊びを重視する本館の特色です。(今後は、お手玉をもっと増やし、女の子に遊ばせたいと計画しています。)

管理運営は市より委託された学区の住民団体に任せられています。(運営委員長 成瀬 司総代会長) 実務担当には、子供の教育に経験のある、元教員が市より嘱託され、「指導員」の職名で一日交代で、午前十時より午後六時まで勤務しています。

・利用時間 子供(原則として学区の小学生)が利用できるのは、午後一時より六時まで。学校休業日、夏休み中は、午前十時から利用できます。大人は、午前十時より十二時と、午後六時以降に利用できます。

・午前中の活動(十時から十二時)

日曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
子供会	PTA健康体操	八・十区バレーボール	五区婦人防災インディアカ	親子リズム	十区ミニソフトバレー	コットンインディアカ
少年団						

月曜日から金曜日まで女性の集まりです。バレーボール、インディアカの皆さんのコートでのハッスル、熱心さ、明るい雰囲気を見ると、健康保持、ストレス解消にスポーツは有効な手だてだと改めて気づきます。

コットン、オリーブの皆さんが、市インディアカ大会で、それぞれ準優勝をとりました。そのトロフィー、表彰盾が玄関に飾られています。子供たちが羨望の目で見ています。

・子供たちが来る前に

指導員は、午前中まず清掃、庭の手入れ、図書室の本の整理、雑誌の補修などの仕事をします。もうひとつ大切な仕事がありま

す。麦茶の準備です。麦茶を沸かし、冷まし、冷水器に満タンにします。一日の麦茶の量は(夏季)十リットルのやかんに六杯、六十リットルです。他の学区の人が、驚くほどの量です。子供たちの「おいしいな。」の一言が支えで、二人の指導員で、秋までは麦茶と決めています。

・ 昼 休 み (十二時から一時)

今年の空梅雨には驚きです。昼下がりともなると照りつける日ざしに、上地三千目周辺は、静まり返り、人影もありません。例年なら、まだ咲いているパンジーもおれて元気がありません。抜いてしまおうと思いましたが、「まだまだ生きていますよ。」と花に言われているようで抜けません。節水のため、洗水なども利用しやりくりしています。時計が一時過ぎを指すと「きょうは誰が一番かな。何人来るかな。」と心が子供たちにとびます。

・ 子供たちとともに (一時から四時)

「爺、麦茶は冷たいか。」と威張った声。「おじさん、坊主めくりをしようか。」「爺、コマを教えて。」どの子もまず麦茶を一杯。「おいしい。」

「一、二年生の常連は、「爺」、「爺」とよぶ。これは、私の孫が「爺」「爺ちゃん」と呼ぶのをまねたものである。孫も同じですので抵抗はありません。

しばし遊んでいると、第二陣、二年生がやって来ます。「爺、ジャンプはいった。」「爺、コマを勝負。」と生意気な童。

「おじさんフラフープをやろうよ。」私の下手なのを承知して挑戦してくる女の子。「よし。」と挑戦を受けたが「一、二・

・五」でストン。フラフープの上質な女の子が多い。百回以上回せる子が何人かいる。

男の子は、サッカー大好き。七個のボールが飛びかうが、柔らかいボールなので当たっても平気です。女の子は、一、二年生共にトランポリン、フラフープが得意です。バトミントンにさそう子もいますが、まだラリーは無理です。今年の一年生は男女とも

に、コマまわしが盛んです。コマまわしの合格者十一人は多いですね。

指導員一人とも子供好き。遊んでいると「湯飲みがないよ。」と呼び出し、湯飲みを洗っていると「トランポリンで三人乗っている。」と告げ口。「ボールが上に乗ったので取って。」等々。指導員とは名ばかり「小間使いだね。」と、二人が会った時苦笑しています。

・ レク室は満はい (四時から六時)

四時ころになると、中・高学年が来る時刻です。レク室が狭くなります。男子はサッカー、一部は卓球。女子はバスケット、バトミントン、そして卓球を楽しんでいます。上級生の重畳感、スピードに圧倒され、低学年が帰り始めます。一言かけると、明日また来ますと、本当に純な子です。まだまだバトミントン、卓球の指導ができますが、なにぶんにもスタミナ切れです。一年間指導すれば完全に逆転されます。バトミントンで五年生の時は完勝でしたが六年の二学期には完敗させられた、二人の女の子がいます。「鉄は熱いうちに打ては真理」

私が、「上地学区ごじもの家」に勤務して四年目になります。五年生、六年生が二年生、三年生の時で、幼い頃からの顔なじみで指導に好都合です。しかし、遊んでいる時、夏の大会前の大切な体、怪我だけはしないように願い目を光らせている七月です。

図書室も時々見回りエアコンの調整をしたり、乱れた机上を整頓させたりします。

ジャンプ、りぼん、などの雑誌が良く読まれます。かたわらでオセロ、将棋、サッカーゲームなどをしていれば単行本を腰をすえて読むなど難しいかもしれません。

将棋は大好き、小中学生に負けたことはありません。ついつい口が出てしまいます。時間があれば子供たちと指したいですが、なかなかできなくて残念です。

六時になると、まだまだ遊び足りない子もいるが規則を守って帰ります。帰る習慣が身につけば素直に帰ります。

きょうも利用人数は百人を越すことは確かです。七月十四日、利用人数百八十人。

・伝承遊び(コマ遊び)

私たちの年代以上になると、子供のころ男はこま回し女はお手玉(おじゃみ)遊びを楽しんだものです。大道芸人顔負けのコマの「大根切り」をして得意な上級生の姿が今でも目に浮かびます。また、今七十を過ぎたおばあさんが「子供のころは五つのお手玉をびよびよいとやったものだ。」と、三つのお手玉を軽々とこなされたのには驚かされました。この二十年ほどコマ、お手玉遊びを町や家で見ることがありません。子供は、野外の木の下や、風の中で仲間と遊ぶ姿こそ絵になります。私たちは、コマ回しとお手玉遊びの灯を消してはいけません、土地学区で「こま回し」の普及に挑戦しています。

コマは唐の国から朝鮮半島の高麗を経て、平安時代の中頃わが国に伝わったといわれています。初めは宮廷の貴族の遊びでしたが、江戸時代には大流行しました。天保年間には、金属の輪ではめた木コマも現れて明治、大正、昭和と大人も子供も楽しめる娯楽となりました。コマの「剣の刃渡り」を実際に見るとすばらしい伝統美だと感嘆させられます。

・コマ回しの練習

コマは、指導してやれば、二時間ほどの練習で低学年でも回せます。高学年なら一時間です。要は、回し方のコツです。水泳、自転車乗り、フラフープなど、できる子にとっては何でもないことです。コマも同じです。小学校の時に体験しておくことが大切だと思います。

コマ回しのこま

①コマの面が上(天井)を向いていること。

②初心者は膝上あたりから回します。左より「」の字を書く要領で、左足の方へ投げる。(ひもが右巻きの時)手を振り回さないことが大切です。

こま回しの練習をしていて、一人だけなかなか回らず、ベソをかきながら頑張り続け閉館直前について合格した一年生の女の子がいました。私も嬉しかったです。

・コマの「手」のせ

これは、五時間から七時間程度の練習が必要です。多くの子が三十分程度であきらめてしまいます。一日一時間七日間の練習が必要です。①コマを手まで引き寄せます。②コマの面は斜め上りで、上を向いていること。③手にコマを着地させる時、手のひらを軽く引くとよいです。

平成三年度より六年度七月までの合格者(五回のうち三回成功すること)の氏名をレク室に掲示してあります。「兄ちゃんの名前があるよ。」と妹が教えてくれます。一回できただけで「名前を書いて。」と請求する一年生がいます。名前が掲示されることが励みになっているようです。

合格者数(こどもの家で合格を確認した子の数) ()内の数字は女子の合格者数

	平成三年度	平成四年度	平成五年度	平成六年度七月
コマ回し	四六名(五)	三八名(八)	一七一名(四二)	八四名(二九)
手のせ	五名	一〇名	二五名(二)	六名

「手のせ」合格者の女子は

中野 幸恵 さん

一年生の時「手のせ」合格者

棚橋 稔 (現二年生)

藤原 将史(現二年生)

田口 明彦(現二年生)

安藤 泰明(現一年生)

横山 知明(現一年生)

「手のせ」が合格した児童には、「綱渡り」を教えています。一度「手のせ」鬼ごっこを

してみたいものと計画しています。

・ふれあい事業（餅つき大会・折り紙大会）

上地学区こどもの家の最大行事で、運営委員を中心に計画し、学校の先生方、子供会の役員さんの参加を得て、例年二学期の終業式の日に行います。小学校の子全員が参加します。餅つきを高学年の子に体験してもらい、つきあげた餅を汁粉に入れたり、きな粉餅にして味わいます。餅つきはだんだん家庭では行われなくなってきている行事ですので、新鮮な驚きと貴重な体験です。準備や後始末を含む労力や費用はなかなかかる行事ですが、補って余りあるものと感じています。

昨年は、折り紙大会を実施しました。西崎指導員とお母さん、おばあさんも参加しました。今でも当日の紙独楽を折って喜んで回している子らがいます。以後の作品は、こどもの家の玄関に展示してあります。指導者、主催者が汗を流せば必ず実りあるものと確信しています。

以上いろいろと「上地学区こどもの家」について書きましたが、私ども指導員は伸び伸びと仲良く遊んでほしいものと願うと共に、集団の学校とは一味違って、人間としての「しつけ」を心がけています。国の宝となる子供たちを任せられています。安全と衛生には十分配慮し、ユマの管理、トランポリンの指導、衛生的な麦茶の提供等々に心がけています。事故対策については、上地小学校との連携を図り協力をお願いしています。

かわいい孫どもをこれからも鍛え、共に遊びます。

命を捨てて戦友と潜水艦を救う

（自己犠牲と勇氣の人、上地四区の故成瀬正雄さん）

上地小学校 松原暁三

1、甲板上からハッチを閉め、潜水艦を沈没から救う

成瀬兵曹殉職の様相概要

昭和十五年八月二十六日伊號第五十四潜水艦は、艦隊訓練中たまたま颶風に遭遇し、長時間に亘る山なす怒濤により、艦橋昇降口より海水奔入の危険に瀕せり。当時艦橋にありて見張りに従事中の成瀬兵曹は、事態一艦の運命に関するを認め、速に昇降口蓋を閉鎖し、艦を救わんと決意す。当時の状況は自ら艦内に入りて後、内側よりこれを閉鎖することは、実施不可能にして、艦外より急速閉鎖する以外に手段なき点を看破し、身は当然激浪に浚わるるの危険を顧みず、突嗟の場合敢然として艦外より、昇降口蓋を閉鎖し、遂に一瞬潜水艦の危機を救ひ得たるものなり。艦を救ひたる彼は激浪に浚われ、八方搜索に手段をつくすも、遂に発見するに至らず。永遠に帝国潜水艦の守護神となるにいたれり。

（昭和十五年十月十四日 海軍省呉鎮守府発表）

殉職の状況

（忠烈成瀬一等兵曹略伝）

昭和十五年八月二十六日伊號第五十四潜水艦八本邦南方海面ニ於テ荒天ヲ冒シ演習ニ参加ス。同日夜間警戒航行中主水罐機構ノ一部不具合ノ為次第二罐内ニ浸水シ船体ノ傾斜モ漸次増大スルニ至レリ。潜水艦長ハ主水罐ノ排水ヲ決意シ直ニ総員ヲ潜航配置ニ就カシメ故障ヲ探究スルト共ニ総主水罐ノ排水ヲ開始セントシタルニ如何ナル原因ニヤ艦ハ突如急速ニ沈下シ怒濤ハ艦橋昇降口ヨリ艦内ニ奔流シ艦ノ運命危機ニ瀕スルニ至レリ。当時橋昇降口閉鎖ノ配置ニ在リシ君ハ艦内ヨリ之ガ閉鎖不可能ナルヲ直感シ艦ノ危機ヲ救ハンガ為身ハ艦外ニ留リテ急速閉鎖ヲ決意セリ。而シテ昇降口ノ閉鎖終ルヤ間髪ヲ容レズ艦ハ海中ニ没入セシモ君ガ犠牲的行為ニ依リ幸ニ無事ナルヲ得タリ。

間モ無ク同艦ハ故障復旧セルヲ以テ直ニ浮上君ノ搜索ヲ開始スルト共ニ僚艦ノ応援ヲ得テ相協力シ付近海面ヲ隈ナク搜索シタルモ遂ニ発見スルヲ得ズ。

（海軍潜水学校）

やや長い引用になりました。ここに登場した成瀬一等兵曹（成瀬正雄さん）は、大正二年二月十三日に愛知県額田郡福岡町字上地三十五番地（現在の上地六丁目三十七番地一）で生まれました。ご存命ならば、現在八十一才です。同級生に、上地地区老人クラブ（共生会）会長の小林茂さんがいらっしやいます。

他人への思いやりや奉仕の心の欠如などのひずみが指摘されている今日です。上地学区の誇り得る先人として、私は改めて、故成瀬正雄さんに注目してみたいと思います。

2、「艦を救ひ怒濤に死す」

（当時の朝日新聞も大きく報道）



故成瀬正雄さん

事故発生から二か月近く過ぎた昭和十五年十月十四日、当時の海軍省「呉鎮守府」が公式に事故概要を発表しました。内容は先に原文のまま引用したものと同一のもですが、これをもとにした昭和十五年十月十五日発行の朝日新聞記事の一節を見てみましょう。

（岡崎市立図書館所蔵の縮刷版より）

海軍魂の権化

艦を救ひ怒濤に死す

昭和十五年当時の朝日新聞報道記事抜粋

身を殺して艦の沈没を救った一兵曹の殉職……成瀬正雄一等兵曹（二七）
愛知県額田郡福岡町出身）である。十五日呉市で執行される海軍葬には、日比野長官も特に自ら臨場の筈で兵曹の海軍葬に長官自らの臨場は異例のことである。……抜群なるその勤務振りと共に一般乗員の模範と称えられしものにしてその殉職は乗員一同の痛惜の極み……

3、ご遺族の成瀬キミさん宅を訪問

（町ぐるみでの葬儀や全国からの激励に感激）

台風二十六号来襲の迫った九月二十七日。故正雄さんの奥様だった成瀬キミさん宅を訪ねました。三善寺のすぐ北側にあるご自宅です。

キミさんのご長男は、ご存じの方も多いと思いますが上地学区夏祭りや盆踊りの太鼓を打つ成瀬忠さんです。「主人とは、一年足らずの結婚生活でした。あんなことになってしまったので。呉の海軍基地近くで、たった二間の下宿生活でした」

キミさんは、五十四年前を思い起こしながら、静かに語って下さいました。

「一か月から二か月もの間、演習で家を留守にする。帰って来たかと思うと、また演習です。ほんとに、一緒に暮らしたのはわずかの間でした。子供が一人できましたが、死産でした」

「あの最後になった演習の時も、出かける直前に一度家

に帰ったようですが、私が留守していたものだから、あつけない別れでした。でも、皆さんが言って下さいましたが、じっとしていることができない人で本当に働き者でした。一代で田畑一町歩も買ったおじいさん（九市さん）譲りの働き者なんでしょうね。」

キミさんのお話は、軍隊生活でのことでなく、故正雄さんのお人柄にふれたものでいっぱいです。亡くなられた直後から、月刊誌「婦人倶楽部」の取材などで大忙しだったこともお話しして下さいました。

「婦人雑誌『婦人倶楽部』の記者の方が自宅にいらっしやって、どんな人だったか思い出話など聞いて行かれ全国的に大きく報道されました。そのためか、全国から激励の手紙が殺到し始め、字の下手な私にとって、返事を書くのが大変でした。毎日手紙を書いていました。おかげで、返事書きが長く続きました。NHK放送局からも取材があったり、地方の新聞に載ったりで、悲しみで沈んでいる間もありません。」

「呉での海軍葬、福岡小学校での額田郡福岡町葬、自宅



自宅でお話されるご遺族の成瀬キミさん



三善寺境内にある成瀬一等兵曹の墓

での葬儀と忙しい日々が続きました。町葬には、桑原愛知県知事さんもおいでになりました。海軍葬の時は、日比野潜水艦艦長さんが、自分が悪かった、本当に気の毒なことをしたと、何度も私に謝られました。とってもお優しい人がらに接して、私は胸が痛みました。」

「そういえば、確か劇にもなりました。新国劇の辰己柳太郎さんや島田正吾さんが上演されたと聞いています」
今年七十三才を迎え、益々ご健在なキミさんの表情には、不思議と思ひ沈んだ表情や暗さは微塵も感じられませ

ん。親孝行な子供さんやお孫さんに囲まれたにぎやかな毎日の暮らしがそうさせているのでしょう。
「主人の弟と再婚して、六人の子供たちに恵まれました。皆さんが、食糧難の時代だったから大変だったでしょうとよく言われますが、おじいさんやおばあさんがじっくりしておられたから、子供を育てたというより、子供たちが育っていったのですよ。」

謙虚なお話ぶりに頭の下がる思いでした。

4、「頭のいい、努力家の正雄さんだった」

（共六生会会長で同級生だった小林茂さんに聞く）

キミさん宅で、上地学区共生会会長の小林茂さんが故正雄さんの大の親友で同級生だったことをお聞きすることができました。そこで、早速、小林茂さんをお訪ねすることにしました。

「そや、正雄さんとは親友だった。小学校、高等科と同級生だった。彼は、タダオ君です。マサオじゃありません。学校を卒業してからも、盆正月に家に帰って来ると、お互いに一緒に寝泊まりしていろんなことをしゃべりな

がら暮らしたもんです。タダオ君は変わったところがあって、畑仕事をするでも昼に

家へ帰って飯を食べるといふことをしない朝飯をたらふく食べて畑へ行き昼は食べない。ずっと畑仕事をし続けるというやり方でした。だから、仕事の能率が格別いい。体ががちりしていたし、柔道や剣道も強かった。思い出はいっぱいあって今でも、時々夢に出てきます。やあ、元気か、といった調子で出てきます。楽しい奴です。頭がよくて家に帰ってから勉強するなんてことは全然ありません。学校にいる間に、全部覚えちゃうという訳です。机を並べていたところは、やい、教えよや、なんて試験の時も言い合った仲ですよ。冬の大谷池に行つて、すっ裸で寒中水泳をやつたりしました。あんまり冷たくて、三日ぐらいで切り上げてやめたことを覚えてます。今夜当たり、やあ茂君と言つて夢に出てきそうですね。楽しみにしています。久しぶりに話し合ってみます」



（より「曹兵一等旗本成瀬の閉るを子ハチ」）

奥様が持つて来て下さった古い写真アルバムに、水兵姿のタダオさんを発見しました。きりっとした瞳。二十七才で青春を終えた若者が、今、上地の私たちに何かを語りかけているようです。背筋を伸ばしペンを置きます。

命を捨てて戦友と潜水艦を救う

（友愛クラブ花木さんと六年生児童の感想紹介）

上地小学校 松原 暁三

九月号の本欄で上地四区出身の成瀬正雄さんの業績と人柄を偲ぶ記事を書かせて頂きました。「命を捨てて戦友と潜水艦を救う」「自己犠牲と勇気の人」と題して紹介致しました。

この記事をご覧になった若松東友愛クラブ副会長の花木六郎さんから、激励の寄稿を賜りました。また、私が週一回授業に行っている六年生一組の子たちは、担任の高橋由美子教諭の働きかけもあり、感想を書いてくれました。

今号では、花木さんの寄稿全文と六年生児童感想の一部をご紹介します。

1、「命を捨てて戦友と潜水艦を救う」を読んで

友愛クラブ副会長 花木 六郎

終戦後五十年を迎えようとしている今、内容はなんであれ、軍人の行為を礼賛することには、相当の勇気と決断が必要だったと思います。

郷土の先輩の偉業を後輩に伝えることは先輩として、また教師として「当たり前」のことも知れませんが、当たり前前のことが通り難いとき、それを敢えて「成瀬正雄」を取り上げられた松原教頭先生に、まず敬意を表したいと存じます。

昭和十五年と言えば、大東亜戦争開戦を目前に、海軍では文字通り「月々火水金々」と昼夜の別なく休む暇もない日々だったと思います。この事業も台風の中、しかも午後九時三十分、真っ暗の海上での出来ことです。

こんな悪条件の中、昇降口蓋を閉鎖する成瀬さんの頭の中に、若しここで死ねば海軍の守護神になれるとか、葬儀には高官の誰それと言った思いは微塵もなく、ただ海軍軍人として、否人間として、目の前に命をかけてやらねばならぬことが起きた。それを当たり前前のごととして力いっぱい果たされたものと思われまます。

成瀬キミさん、小林茂さんのお話にもあるように、成瀬正雄さんは、何をやられるにも常に一所懸命、力いっぱい、それが、人間としての生き方だと、改めて成瀬正雄さんから、人の生き様について教えられた気が致します。

天は「人間には、命をかけても守らねばならぬものがある」ことを教えるため、私達に成瀬正雄さんを遣わされその任務が終わると、直ちに天に呼び戻されたものと思われまます。

そんな成瀬さんは、天国の一番いいところから、故郷上地をいつも見守っていて下さることと信じます。改めてご冥福をお祈り致します。

2、六八年生児童の感想紹介

素晴らしい勇士

下河内 清夏

私は「死」ということをこわがっています。死んでしまうことは、つらいことだし、まわりの人にとっても、とても悲しいことだと思うからです。

だから、私が潜水艦の中にいる人だったとしたら、とてもつらくて、もう自分は死んでしまうのだろうと思ったでしょう。それは、大切な命を捨ててまで、自分たちを助けてくれる人がいるとは思わないからです。

しかし、成瀬さんは潜水艦の中の人々の命を救いました。自分の命を捨ててまでです。私は、成瀬正雄さんを素晴らしい勇士だと思いました。私は、この話を聞いて、成瀬さんを尊敬しています。でも、実際に、このような潜水艦の事故があっても、私は命を捨てることはできないでしょう。

それで、やっと成瀬さんが勇士だということに気づきました。私は、命を捨ててまで、できないことがたくさんあります。だから、その分、他のところで、いろんな人を助けていきたいです。

潜水艦を救った

鈴木 春佳

この話を聞いて本当に驚きました。こんなに素晴らしい人が上地にいたと知って。

私には、成瀬さんのしたことは絶対にできなかったと思います。でも、成瀬さんはどんな思いで海の中へ飛び込んでいったんだろう。

きっと、潜水艦の中にいるみんなを救えるのは、外にいた自分だけしかないと思ったからでしょう。成瀬さんだっけと怖かったと思います。しかし、今、みんなを助けなければという気持ちの方が強かったからできたの

でしょう。私は、成瀬さんのように素晴らしいことはできないけれど、小さなことでも人の役に立ちたいと思いました。

みんなのために

長江 脩

今日、ことばのきまりの時間に教頭先生のお話があった。「命を捨てて戦友と潜水艦を救う」という用紙をもらって、それを読んだ。

難しい漢字でよく分からなかったけど、あとで、教頭先生が教えて下さったので読みがなをうった。成瀬正雄さんは、朝ごはんをおなかいっぱい食べて、昼は食わずに働き通してから夜おそく夕ご飯を食べる。それまでずっと働いている。そんな人だった。

事故のあった日は、甲板で仕事をしていた時、急に風がきて潜水艦のハッチが閉まらなくなってしまった。そのため、潜水艦に海水が入ってしまい、沈みかかていく。

そこで、成瀬さんは、自分が波にさらわれるのを承知で外からハッチを閉め、自分は流されてしまった。故障が直ってから、浮かび上がった潜水艦が一面の海をさがしたが、だめだった。

ぼくは、みんなのために自分の命を捨てて助けたということが、すごく感動した。でも、こんなふうにして亡くなったなんて、すごくかわいそうだなと思った。

上地にこんな人がいたなんて

桃井 由紀

上地にはすごい人がいたんだなと思いました。

教頭先生が話をして下さって、プリントも頂きました。それは、成瀬さんという人の話です。自分の命を捨てることになると分かっていたのかも知れないけれど、潜水艦のハッチを閉めて、仲間と潜水艦を救ったのです。

そのことに、私はすごく感動した。成瀬さんは、人の命を救ったけれど、亡くなってしまった。その時、台風がきていた。それなのに、訓練をしていた。しかし、悪天候のために、成瀬さんは亡くなったのです。

もし、晴れていたら、助かっていたかもしれません。でも、なんて勇気のある人なんだろうと、思います。今、もし生きていたら、いろいろなお話が聞けるのになあと、残念です。

お墓にお参りしたい

田中 星路

この成瀬さんは、潜水艦に乗っている時、台風と遭遇し、ハッチが閉まらなくなってしまいました。そのため、自分がいた甲板上からハッチを閉めて、艦内の人たちを助けることはできましたが、成瀬さん自身は波にさらわれて死んでしまいました。

ぼくは、正雄さんのお墓にぜひお参りしたい。この上地にこんな偉い人がいたなんて、今まで全く知りませんでした。おばあさんにもぜひ話してあげたいと思いました。

新上地八景を歩く会

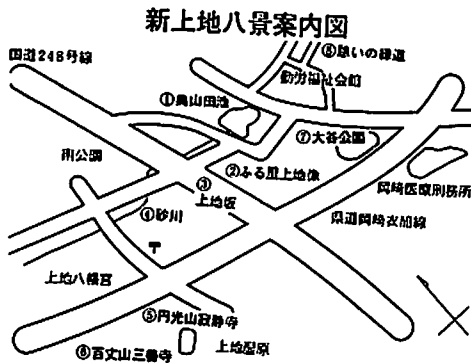
十一月十三日(日) 上地学区社教委員会主催による『新上地八景を歩く会』が催されました。

はじめに「新上地八景」について紹介します。

上地を第二のふる里として、全国各地から集まってきた人々とともに、昭和五十八年に上地学区が誕生しました。学区誕生以来目覚ましい発展を遂げた上地学区を更によく知ってもらうと共に、ふるさとを愛する心を育てようという気持ちから「上地八景絵はがき」が平成二年十月に上地学区家庭教育推進協議会の事業として作られました。そして、平成四年十一月には、学区・学校創立十周年記念式典が盛大に行われました。新しい上地学区の町づくりは、更なる発展を目指して第二の段階に入りました。これを機に「新上地八景絵はがき」発刊されました。

「新上地八景」

- ① 奥山田池 野鳥の憩いの場でもあり、四季を彩る樹木も素晴らしい。
- ② ふる里上地像 学区民の新たなふる里を象徴している。
- ③ 夜景上地板 街路樹の美しさと共に、車のライトが行き交う夜景は格別。
- ④ 砂川 水源を奥山田池に発し、夕日に照らされた川面の美しさ。
- ⑤ 円光山寂靜寺 石段と山門を通して見える本堂の風格は心に迫る。
- ⑥ 百丈山三善寺 樹齢百年を越すカシの大木が茂る。
- ⑦ 大谷公園 「平成の泉」から吹き上がる噴水は、新生上地の勢いの象徴。
- ⑧ 憩いの緑道 落ち着いた環境を醸成し、散策や静かな語り合いのできる場。



『新上地八景を歩く会』は、本年度で二回目です。第一回は、昨年度行われ、②ふる里上地像 ①奥山田池 ⑤憩いの緑道 ⑦大谷公園 の順に巡りました。また、上地だよりで紹介された矢崎古窯跡、大谷公園の古窯跡も見学しました。今回は、⑤円光山寂靜寺 ⑥百丈山三善寺 と上地八幡宮を巡りました。

「新上地八景を歩く会」と書いた横断幕を先頭に、百人余の参加者が小春日和の半日を楽しみました。最後の上地八幡宮では、体育委員・PTA役員さんによる心づくしのおでんがふるまわれました。

⑤円光山寂靜寺

千四百年前、当地を巡行した聖徳太子が阿弥陀如来像を安置されたのが契機となって建立された。

境内は車社会から隔絶されたことの雰囲気を感じ、石段と山門を通して見える本堂の風格は心に迫る。

⑥百丈山三善寺

旧国道二四八線から山門に通じる階段を上ると、樹齢百年を越す檜の大木（岡崎市の名木ツブラシイノキもある）が茂る。

元禄十二年に当時の上地奉行早川武左衛門により寄進された雷の災害から上地を救うといわれる「長命地藏」も祭られている。



横断幕を先頭に碧南線を行く参加者

上地八幡宮

源頼朝が、上地の武将大見藤六の屋敷に立ち寄った折り、上地八幡宮に戦勝祈願をした。

戦勝した源頼朝は、一一九〇年に上地八幡宮を建て替えて寄進した。

上地の氏神様として祭られ、国宝の指定もある。

「唸り石」や、戦没者「慰霊之碑」など上地学区ゆかりの碑もある。

説明して下さった方

- ・寂 靜 寺 檀家総代 鈴木昌明氏
- ・三 善 寺 信徒総代 成瀬俊弘氏
- ・上地八幡宮 神社総代 辻村秀夫氏

記念品協賛団体

- ・上地郵便局・岡崎信用金庫・名古屋銀行
- ・岡崎市・碧海信用金庫・社教体育委員会



上地八幡宮で辻村氏から説明を聞く

「新上地八景を歩く会」に参加して

上地七区 竹内 喜美子

十一月十三日(日)、小春日和の上天気、「上地八景を歩く会」に参加しました。集合地の上地小学校に着いて、お年寄りから若い子供連れのご夫婦、小学生のみなさんなどの、多彩の顔ぶれ約百名のかたがたの参加にびっくりしました。

二四八号線のけやき並木の美しさにあらためて気づき、心晴れば最初の目的地寂静寺へ。

寂静寺は、自宅と目と鼻の先、粗大ごみの時には時々訪れる場所です。しかし、なぜか南に折れて上地変電所にたどりつきました。ここで、教頭先生から上地湿原の説明がありました。水鳥の訪れと、市境を流れる柳川に今は幻の魚となりつつあるメダカがいることなどをお聞きし、「そうか、ここが見たくて遠回りしたんだな」とひとり合点していると、やがて、立派な石段と山門に到着しました。やっと、企画の方々の心配りに気づきました。寂静寺では、檀家総代の鈴木さんからお話を伺いました。

続いて訪れた三善寺は、昨年の火災で焼失していて、地藏堂だけが寂しく建っていました。信徒総代の成瀬さんの熱のこもった再建のお話を伺いました。ふと足元を見ると、懐かしいシイの実が……。そのあとは、もっぱらシイの実集めに専念。ポケットいっぱい土産を拾ってしまいました。ここで、缶コーヒーをいただき、最後の目的地、上地八幡宮へ。

神社総代の辻村さんの説明をお聞ききして、歴史の古さ・文化財としての価値を知り、あらためて氏神様のありがたさを再認識しました。

PTA役員と体育委員の方々の作ってくださった温かいおでんをいただき、記念品までいただいて家路につきました。道中では今まで知らなかった方々と親しくお話することもでき、また、こういう企画のある時にはぜひ参加しようと思いました。伊藤社教委員長さんはじめ、企画の方々、上地小の先生方のご尽力で、本当に有意義な一日を楽しむことができました。

上地八景を歩いて

六年 降旗 俊一

ぼくたち男子バレー部六年生六人は、新上地八景を歩く会に参加しました。今まで何回も上地八景は見たことのあるので、余り興味はありませんでした。しかし、あらためて見たり説明を聞いてみると、聖徳太子のような有名な人が、かかわっていたりしてびっくりしました。特に最後の上地八幡宮では、井戸があったなんて全然知りませんでした。大人の人も、

「へえ、こんなところに井戸なんかあったのか」と言っているほどでした。

バレー部の子たちもいろんな感想を持っていました。

大野 自分の住んでいる身近なところにも、すごく古いものや貴重なものがたくさんあってびっくりしました。

田口 上地八景はこんなにいい風景で、歴史があるなんて知りませんでした。



寂静寺で鈴木氏から説明を聞く

松田 三善寺など上地にあるお寺に、歴史に残るものがたくさんあってびっくりしました。

桃井 お寺のことを詳しく知ることができました。たいした所じゃあないと思うんですけど、よく説明を聞いていたら歴史に残るすばらしいお寺だったんだなと思いました。

鈴木 まだできたばかりの上地にも、聖徳太子など歴史に残る人物がかかわっているなんてすごいと思いました。

みんな、こんな新しい町に、とまっているようでした。ほくも、歴史に残ることは、古い町にしかないと思っていました。これからは、昔の人が苦勞して残したものを大切に守りたいと思いました。

また、今こうして平和に暮らせるのも、この人達のお陰なので感謝しなくてはいけないなと思いました。



三善寺の階段を上る参加者

上地八幡宮のお祭り

十一月三日夜、上地八幡宮を訪ねました。境内で、厄年の人たちが手筒火花をあげるということで、教頭先生と二人で出かけました。駐在所横から境内へ向かう道の両側には、屋台の店が並び祭りのムードを盛り上げています。おもちゃ、お菓子、りんご飴、綿菓子、いか焼きなどの店が並び独特の雰囲気をもっていました。

人混みの中で上地小学校の子供たち数人と出会いました。意外に子供たちの姿が少なく感じました。今の子供たちは、地域のお祭り以外に楽しむことがたくさんあるのか、習い事などで忙しいのかなにか寂しい感じがしました。

さて、境内ではすでに手筒火花があげられていました。白足袋にさらし、上半身裸という威勢のいい男衆の姿が、火花の明かりに照らし出されていました。爆竹のにぎやかな音を背景に繰り広げられる火花絵巻に度胆を抜かれた感じでした。

この厄払いの火花を運営しているのは「八華連」という組織です。現在は上地四区の早川侑利さんが中心となって「八華連」を運営しているそうです。



菅沼剛

「八華連」について、上地五丁目の小山三郎さんが市政だよりの「まちの特派員だより」として書いておられますので、その全文を紹介します。

厄払いと八華連

上地五丁目 小山 三郎

厄払いの行事は、古くから各地で神仏に参ったり、近隣知己を招き、共に飲食をして多くの人に厄を分担してもらったりと、いろいろな形で受け継がれています。

当地、上地では、毎年十一月三日の夜、旧二四八号線を上地八幡宮まで、唄と爆竹の音に囲まれながら、皆で長持ちを担ぎ、勇壮に練り歩きます。そして境内では、厄年の男衆たちが裸姿で威勢よく手筒花火を打ち上げ、厄年の厄払いの行事を行います。

この厄払いの準備と運営は『八華連』によって行われています。

毎年、先輩から神社の参拝の仕方、花火の上げ方、町のしきたりなどを引き継いできました。しかし、前厄、本厄、後厄の三年間で人が入れ替わってしまうので、正しく伝わらないことがあり、今から十八年前に当時の厄払いを済ませた人たちがこの組織を作ったのです。

名称は上地八幡宮の宮司、大須賀さんに付けていただいたそうです。以後、上地八幡宮のお祭りのとき『八華連』がお手伝いをして、厄払いの花火を上げてきました。年々住民の数が増えるに従い、奉納の花火は盛大になってきています。これは、この厄年（男性四十二歳、女性三十三歳）を機に、上地八幡宮の氏子として花火を奉納する人が多くなってきたからだと思います。

今年のお祭りの夜には、厄年の男衆による厄払いの勇壮な手筒花火が見られることでしょう。

手筒花火は下の写真のように、五・六人が一組になって手をつなぐような形で行われます。

足下には、景気づけの爆竹が鳴らされています。花火の前では、熱さに耐えて花火を上げている人を励ますかのようにこれまた景気づけの鐘が打ち鳴らされます。境内を明るく照らし出す手筒花火の光と共に、爆竹の音、鐘の音、かけ声、更に観衆の拍手が加わって最高潮に達します。火の粉が容赦なく降りかかってくる。髪の毛はちりぢりになってしまし、小さなやけどがいくつもできてしまうそうです。

手筒花火の合間には、打ち上げ花火、乱玉、さらに台にのせて上げる大きめの手筒花火など次々と行われます。

また、見物の子供たちのために子供用の花火も用意され、親子連れで楽しめるお祭りの工夫にも心配りが見られます。

このような勇壮な行事には危険がつきものです。八華連の早川さんにお聞きすると、一番気をつけているのは安全対策だそうです。せっかくの行事が事故に遭っては大変です。八華連の役員さんは毎年花火の講習を受け安全に気を配って見えるそうです。



さらに、上地消防団の協力体制で、境内の隅には消防自動車が待機していました。

祭りの運営には、さまざまな苦勞があるようです。奉納花火の募集から始まり、当日の運営の細かい打ち合わせなど何回も行い当日を迎えられたわけです。

マイクを手に、軽妙そして威勢のいい紹介をする進行役の成瀬さん、奉納花火の受付をする藤田さん、火の粉を浴びながら景気づけの鐘を打ち鳴らす横山さんはじめ八華連の皆さんのチームワークの良さがうかがわれました。

こうした行事を通して、地域の大人のつながりが一層深まり、地域を愛する心の醸成へとつながっていくものと思います。厄年を契機に手筒花火を通して知り合った仲間たちは、やがては上地学区を愛し、上地学区の発展を推進していく原動力となるわけです。

「大変な仕事ですが、厄払いの行事が子供の代まで伝わり、上地の伝統行事として育っていつてくれることを楽しみにしています。」と語る早川さんの言葉が印象的でした。



小林さんをお迎えしてー成瀬さんを語るー

六年担任 高橋 由美子

「この年になって、子供たちの前で話ができるなんて思ってもみませんでしたよ。ありがたいことです。幸せです。」と、語られる小林さん。この日、幼なじみの成瀬さんのお話を伺おうとお願いしたら快く引き受けてくださった。

「今朝は、成瀬君のお墓参りをしてきましたよ。それにお宅に寄って御霊前に御参りをしながら、『今日、上地小の六年一組に行って君の話をしてくるからな。上手に話せるように見守っていてくれよ。』と、話してきました。それにしても、成瀬君は幸せ者です。亡くなってしまったのはとてもつらいことだけれど、今でもこんなふうに皆から思ってもらえて。」

このお話を伺っただけでも、小林さんの温かなお人柄と、成瀬さんとの強い絆を感じた。わずか一時間足らずではあったが、小林さんが子供たちに向かわれる熱心な話し振りに、思わず胸が熱くなった。

私は、小林さんから成瀬さんの話を聞く日を楽しみにしていました。小林さんは成瀬さんとは一年生の時から友達で、成瀬さんのことをよく知っています。私は成瀬さんを尊敬しているけど、小林さんはいまだに、「成瀬君が亡くなったことが信じられない。」と言っていました。なんだか小林さんの気持ちが分かったような気がしました。

(下河内清夏)

昔は一つの机に二人いっしょに並んで勉強し、小林さんと成瀬さんとは一年から六年までずっと隣で勉強していました。小林さんの話では成瀬さんは、けっころがちりちりして泳ぎがうまいと言っていたから、潜水艦から海へ投げ飛ばされても泳いでどこかの島で生きていてほしいです。

(小石 秀昭)

小林さんは上地に生まれて上地に育ちました。だから、上地の昔のことなどよく知ってみえます。上地には貧乏な百姓が多く、田んぼがあっても十俵も採れなかったそうです。

(石川 真夕)

私たちは学校がいやだとか言っているけれど、昔は子供でも家にいると働かないといけないので、学校へ行くのが楽しみだと言ってみえた。成瀬さんは小さい頃から落ち着いていて、細かいことはあまり気にしなかった。それに、よく働いて、六十キロもある米俵を担いだり、大人がやる仕事をやってしまう。それよりも、普通の人だったら昼御飯の時に休憩をするのに、成瀬さんは時間があったら朝御飯を食べたら夜までずっと働いていたそうだ。私にはできないようなことばかりだった。

(中瀬 直子)

成瀬さんがほくたちと同じ六年生の時にとてもよく働き、大人のする仕事までしてしまうぐらい力持ちだった。ある日、焼きいもをやっている枯れ草が燃え、わたらばを積んでおくつじみちに火が付きそうになった時、わらを持ち上げ田んぼに投げるようなとっさの判断と勇気のある人だったそうだ。ほくも、成瀬さんの勇気を見習い、いやなことには逃げないで立ち向かっていけるようにしたい。

(星野 慎介)

子供の頃からみんなの代表みたいだったと思う。私だったら、そういう時ドキッとするだけで行動することもできなくて見過ごしてしまう。そういうことがさっとできる勇気のある人になりたい。

(伊藤 有希)



成瀬さんが一番信用できたのは小林さんだと思います。だから、海軍に行く前に小林さんの所へ寄ったのでしよう。そして、小林さんも成瀬さんを一番信用していたから、成瀬さんのいろいろな面を知ってみえるのではないのでしょうか。お二人ともいい人だと思います。

(桃井 由紀)

成瀬さんとは仲が良く、六年間も席が隣だったと聞いて、よほど縁があったんだなと思いました。それに成瀬さんが亡くなられたことを聞いて、小林さんはさぞつらかったことでしょう。なぜかと言うとなら、もし私の友達が亡くなったら、とてもつらい気持ちになるからです。

(赤堀 加奈)

潜水艦に乗って訓練をしていた成瀬さんは信号兵だった。潜水艦が海の外に出る時には一番先に中から出て、沈む時には一番後に入ると重要な役目についていたことがわかった。だから、あんな事故にあってしまったのかもしれない。成瀬さんも小林さんのように八十二才まで生きていてほしかった。

(宇井 綱要)

戦争はやっぱりいやだと思いました。目の前で仲間が死んでしまうのは信じられない気持ちだったと思います。成瀬さんはそんなことが起こってほしくなかったから、命を捨ててまで潜水艦の外に出て言ったのかもしれないと思いました。

(曾和由利香)

私が一番に残ったのは、小野さんの話でした。小林さんが中国へ兵隊として行き、船で荷物を運んでいた時のことです。一発の玉が三人に当たってしまったのです。やはり突き抜けていったのでしょうか。頭や胸にあたった人は即死し、腹にあたった小野さん。腹なんて死にきれないでしょう。水を求める声も、「うまい。」と言った声も、「抱いてくれ。」と言った声も皆同じ人なのです。その小野さんが二時間ぐらい苦しみ続けているのを、ずっと見守っていた小林さん。一歩間違えば小林さんも死んでいたと思うとぞっとしました。・・・命を捨ててまで人を思いやるのが私にはできません。けれども、小林さんのようにできるかぎり人を思いやることのできたらと思いました。

(藤原 絵美)

成瀬さんは勇気があったから、多くの人がいる潜水艦を助けることができたのだと思います。ぼくは、小林さんの最後の言葉、

「人の世話にならないように、人のためになることを思うんだよ。」
が心に残りました。この言葉を思っ、女子とかいろいろな人のためにためにすることをやっていきたいです。

(田中 星路)

小林さんがとても分かりやすく答えてくださったので、教頭先生から聞いていた成瀬さんのことよりもっと詳しく知ることができました。戦争は、人が死んでしまったりけがをするだけだから、絶対にしてはいけないと思った。三学期の学芸会には、今日小林さんから聞いたことを参考にして、戦争で傷つけ合うのは絶対にしてはいけない。ことを改めて知ってもらいたいと思います。

(植村 優子)

戦争のために多くの人が命を失ってしまったのは、ひどく残酷だと思いました。こんな悲劇を繰り返さぬように願っています。小林さんから聞いた話を生かし、すばらしい成瀬さんの勇気と戦争の恐ろしさを、学芸会を見てもらう人に伝えたいと思いました。

(市川 兼伍)ご

子供たちにこんなにも多くの感動を与えてくださった小林さん、ありがとうございました。いつまでもお元気でいて下さい。



柳川の源流を訪ねて

柳川は上地学区と幸田町との境を流れ幸田川へ注いでいます。学区を流れるもうひとつの川、砂川に比べ生活排水による汚れが少なく水辺の自然が残されている川です。ふな、たなご、めだかさりがに、どじょうなどが棲息し子供たちの遊び場のひとつになっています。特に二年四組では、柳川の生き物調べを積極的に取り組んでいます。また、二年生では、生活科の授業で柳川の生き物を調べる学習をしています。しかし、最近では川の汚れが心配される状況になってきています。そこで、柳川の源流を訪ねてみることにしました。

十二月のある日、風のない穏やかな午後現地に向かいました。メンバーは、山歩きの得意な前PTA会長宇井さん、教頭先生松坂先生そして私の四人です。あらかじめ地図で調べておいた地点から、源流と思われる谷へはいつていきました。京ヶ峰岡田病院から緑が丘へ抜ける道の途中から東に向かって谷へはいつていきました。谷の入口には、農林水産省坂崎吐水槽と表示された門柱が立っています。水の非常に少ない時期でしたが、谷へ下りて



柳川探索メンバー 宇井さん・教頭先生・松坂先生

いくと、積み重なった落ち葉が徐々に湿り気を帯び、靴に湿り気が伝わってきます。そして、谷の一番低いところに細いきれいな流れが見られました。自然の保水能力の大きさに驚かされると同時に、森林の大切さを実感しました。

道路から六、七十メートルほど上がると、北側にも小さな谷が開けていました。更にそこから二、三十メートル上ると谷は行き止まりです。そこから南へ少し上がると尾根へ出ます。そこに坂崎吐水槽の大きな水槽があります。この水槽までの道は舗装されています。この道の脇に鉄のパイプが立っています。何か空気ぬきのような感じのようですが、その時は何だかわかりませんでした。

さて、この坂崎吐水槽は農業用水のための水槽だそうです。下の石塚池からポンプで水をくみあげているのだそうです。私たちが上ってきた道の脇にある鉄のパイプは、道の下を通っている導水管の空気穴と思われまます。

この水槽の水は、幸田町の特産である筆柿の畑などに送られているそうです。

私たちはそこから尾根伝いに更に頂上を目指して進みました。

急な尾根道を上って行くと道の両側に、奇妙な穴がいくつもありました。道にはきらきら光る白雲母がたくさん落ちています。

この穴は、昔、雲母を掘り出していた穴だそうです。この辺りは領家変成岩の石英片岩の地帯です。雲母を採掘するなんておかしいなと思いましたが、石英片岩のなかに貫入してきたベグマタイト（巨晶花崗岩）の雲母を取っていることが後からわかりました。それにしても何の目的で雲母を取っていたのでしょうか。化粧品材料だということを知りました。電気の絶縁体に使っていたのかもわかりません。詳しいことはわかりません。穴を掘って雲母を取っていたのは明治時代以前のことだそうです。

さて、尾根道を進むとやがて山頂に到着しました。上地小学校の校歌にある京ヶ峰の山頂です。ここには、三村神社奥宮という石柱がたち、小さな祠がありました。また、三角点もあります。

祠の脇に石碑がありここには、「京ヶ峯龍頭山柳澤稲荷大明神 霊籠木」という文字が刻まれていました。日本武尊の伝説もあるようです。

この山頂へは、緑が丘側からも登山道があります。私たちはここから、今来た道を下り、柳川の源流から下流方向へ向かうこ



尾根道の脇にある雲母を掘った穴



農業用ため池の石塚池

とにしました。尾根道を下り、先程の坂崎吐水槽まで戻ると、南側に視界が開け、坂崎の集落、二四八号線、葵カントリーなどが見渡せます。筆柿の産地の丘陵地帯へ水を送る地理的關係が良くわかります。

再び、尾根道から柳川の源流の谷を下りました。谷の奥はほとんど水の流れは観察できません。しかし、落ち葉のじゅうたんの下にはかなりの水が含まれていることとします。谷の出口付近に来ると小さな流れができています。これが源流だと確認しました。この小さな流れは、道路をくぐり池に注いでいます。この池は農業用のため池で石塚池といえます。ため池は上下二段に分かれています。

ここからソニー幸田工場の脇を南へ下っていきます。池から流れ出る水はともきれいです。脇からは、所々鉄分を含んだような地下水がちょろちょろと注いでいるところも見られました。池から百メートルも下ると民家が現れます。この辺りから生活排水が流れ込み始めます。川へ注ぐ管からは洗剤の泡が見られます。ここから下流は更に民家が多くなっていきます。ソニー幸田工場へ入る二四八号線の信号の下でもう一本の流れと合流します。



尾根から南を望む この斜面の下に導水管がある

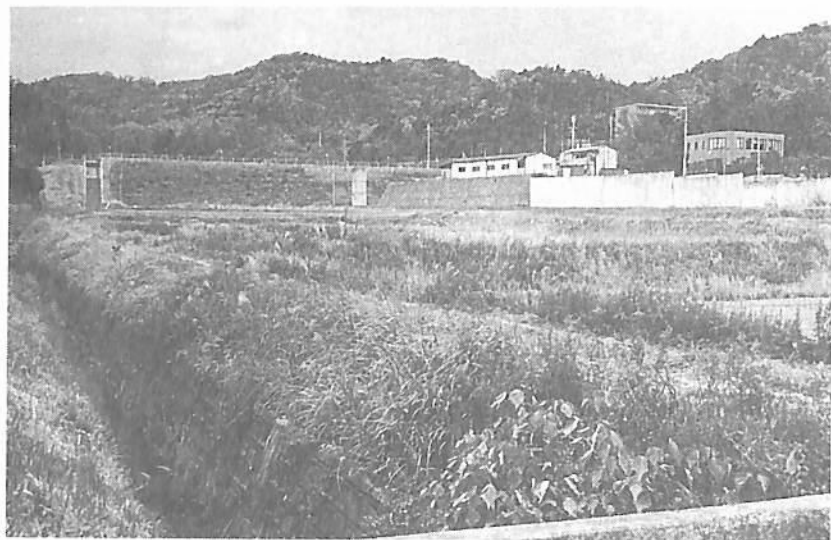
これはソニー幸田工場正門へ通じる谷からの流れです。したがって、上地配水池のある山の南側の斜面ということができます。先程の谷とこの谷の二つが源流であることが確認されました。

二つの流れが合流した柳川は、川幅が広がって幸田浄水場の横を通って上地学区の方へと下っていきます。幸田浄水場の付近から、川の両側にジュズダマが密生しています。

ジュズダマは、水辺に生える熱帯アジア原産のイネ科の多年草です。初秋に葉の付け根から花穂を出し、硬い球状の苞葉につつまれた雌花と、この苞葉をつきぬけて生ずる雄花とをつけます。花の後に苞葉は更に硬くなって果実を包みます。この硬い苞葉(玉)が数珠玉に似ているところからこの名がつけられたそうです。

昔は、子供のおもちゃとして親しまれていた植物です。女の子は首飾りや、おじやみの中身にも使ったようです。経験のある方も見えると思います。

今の子供たちはこの、ジュズダマを使った遊びはあまりしないようです。このジュズダマの群落は四区あたりまでずっと続



石塚池から流れ出る柳川(左端)と水源の山

いています。

上地変電所の近くまで下ってきました。この付近が子供たちが一番良く遊ぶところです。水はそれほど汚れてはいません。しかし、生活排水はかなり流れ込んでいます。これ以上この川が汚れないようにしたいものです。

夕日が西の空を赤く染めています。私たちの探索もここで終わります。

上地小の校歌にある京ヶ峰の西斜面と上地配水場の山の南斜面の二つの谷から流れ出る柳川が、自然と親しむ子供たちの友達のような川であってほしいと願うものです。



京ヶ峰頂上の祠

学級文化活動「ふるさと上地」から得たもの

六年一組担任 高橋 由美子

この一年間、学級文化活動のテーマとして『ふるさと上地』に取り組んできた。自分たちのふるさとを探究し、地域の歴史や風土に関心を持つことができればという願いからである。また、地域の方とのふれあいを通して、心の交流ができるようにすることも、大きなねらいである。まず初めに、成瀬司さんを教室にお招きして、上地の歴史や上地にまつわる話、区画整理事業前の様子を話して頂いた。それから、地域別にグループに分かれて、課題について調べ学習をしたり、地域の方にお話を伺った。これまでに、ふるさとシリーズで紹介された内容が多いが、子供たちにとっては、自分で見聞きしたので、とても新鮮であった。そして、調べたことを、①上地マップ ②上地年表 ③絵本 ④新聞 ⑤ビデオ作りと、一人一役を受け持つようにした。

☆ 若石松東の昔目と今 (柴田勝さん)

市川兼伍・杉浦 航・円山 徹・岡田愛生・鈴木春佳

今から四十年ほど前の若松東の辺りは、松林がずっと続いているのどかな所だった。人家はほとんどなく、五十メートルぐらいの山が、柱町や二四八号線の所まで続いていた。岡田病院の辺りの山が一番高く、標高五十七、一九五メートルもあった。しめじやぞうばつというきのこの他に、松茸もたくさん採れた。山にはキジやキツネや山うさぎなどの動物が住んでいた。

区画整理事業の時、ブルトーザーが山を削っている様子を見て、「上地の山が動いた」と感じたのも、わかるような気がする。

若松公園の隣にある「荒雑山」は、「天狗山」とも言う。荒雑山の神様を守っているのが天狗なので、そう呼ばれている。戸田よきさんが、上地は将来開けると思っ作られた。昭和二十年に建てる場所が決まり、昭和三十一年に完成した。しかし、昭和三十四年の伊勢湾台風の時倒れてしまい、建て直して今の荒雑山ができた。

☆ 十八八台の窯跡 宇井綱要・真野孝二・赤堀加奈・小林里美・黒柳美香
今から千年も昔（平安時代）、山の中に入り集団で焼き物作りを行う「焼き物師」たちが住み着いていた。その窯跡は今でも残っている。今一番はっきり残っているのは堤ヶ入古窯である。

この窯は、山の斜面に穴を掘って、天井の部分に後から土をかぶせて作るので、穴窯と呼ばれている。主におわんや皿、かめなどを作っていた。私たちが大谷に行った時には、粘土の石があった。それには人の指の跡が残っていた。本当に千年も昔の人の指の跡かと思うと、不思議な感じがした。この他にも、奥山田池のほとりの下矢崎古窯と、勤労福祉会館の東の上矢崎古窯がある。

この辺りは山が多かったことから、今でも坂が多い。「6の1上地マップ」には、大谷坂や上地坂などの坂を書き込んでいった。



☆ 砂川の昔と今（加藤又治郎・又之信さん） 太田 誠・古川貴嗣・山川元輝・佐野恵子・中瀬直子

「砂川」と呼ばれているわけは、名前のとおり砂がたくさんあるからだ。以前の砂川は、水を飲んだり米を炊いたり、洗濯ができるほどきれいだった。腕の太さぐらいのうなぎもいたし、昭和四十年ごろまでは、泳いでいる人もいた。今の砂川からは考えられない。それも生活排水が流されるようになってから、どんどん汚れていった。今の砂川にハエやメダカがいないのは、水が汚くて死んでしまったために、他の場所に行くからだ。「お助けまん会社」が計画した砂川の奉仕作業の時にも、魚の死骸やビデオテープなどがあった。石けん水などの汚い水をできるだけ流さないようにしたり、川にゴミを投げないようにしてほしい。

☆ 寂静寺の住職さん・鈴木昌明さん

飯塚拓人・鈴木齋元・植村優子・曾和由利香・藤原絵美
千四百年の昔、当地を巡行した聖徳太子が阿弥陀如来像を安置されたのがきっかけで建てられた。本堂は文化五年（千八百五十年）頃に、桜井村から、村人が二十七両で買ってきた。それを、花火屋の成瀬保治さんのおじいさんが建てた。寂静寺の中には、南無阿弥陀仏と書かれた掛け軸があり蓮如上人が書いたといわれているが、本堂のことははっきりしない。

釈迦如来像のある所には、元は蓮如上人の孫の墓だというが、実際には



〈水車小屋について話される加藤又治郎さん〉

衣類ぐらいで、お骨は出なかったという。また、寂静寺の寺小屋は、上地初の学校だった。その先生は、何と住職さんのひいおじいさんだという。

☆ 上地八幡宮の秘密山（大須賀宮司さん） 小石秀昭・長江 脩・浅野麻衣・伊藤有希・桃井由紀

上地八幡宮にある「うなり石」の話は良く知られているが、他にも宇津谷峠に、今でも「夜泣石」が残っている。女の人が追いはぎに会って殺されてしまい、お腹には赤ちゃんがいたから、泣き声が聞こえてきたのだろうか。うなり石のうなり声の正体は、食用ガエルのような重い声だそう。しかも、いつも夜に泣くのではなく、気味の悪い日だけ聞こえるという。

また、上地八幡宮の裏には、鎌倉街道が残っている。大須賀さんが「歴史の古道」と名づけられた。私たちが両手を広げて囲めるぐらいの太さの、大木が五本ぐらい残っている。

区画整理事業が終わって、「吉良道」という看板ができた。今の衣浦線から刑務所の方に本当の吉良道がある。馬頭や藤川にも吉良道がある。吉良道は昔「吉良街道」と言った。

☆ 藤上八の地蔵と一本杉（畔柳市太郎さん） 小嶋巨治・菰方泰昭・星野慎介・小林祥子・早川容子

昔、上地町の浜街道と鎌倉街道の辻に、藤六のお地蔵さまがあった。しかし、区画整理のために、その場所で町を守ることができなくなってしまって、やむなく今の児童公園の東側に移転した。道祖神とも言われており、悪い病気や悪い人が入らないようにという意味であり、道標でもある。近くの星野ときさんという方が、お水をあげたり花をお供えている。

また、今の福田さんと中根さんの家の間に、一本杉があった。昔は田んぼで、その真ん中に生えていた。高さは五・六メートルだったが、これも区画整理のために伐採し、昭和五十八年一月二十八日に上地町公民館に持ってきた。

畔柳さんは、区画整理事業やそれ以前の写真をたくさん持ってみえて、

当時の様子を詳しく教えて下さった。一本杉を伐採する前に、神主さんがお祓いをしている写真があった。三百年の生き続けた一本杉をねぎらう気持ちやふるさとを大切に思う気持ちが伝わってきた。実践報告会の授業の時も教室に来て下さって、質問に答えて下さったりお話をして下さいました。

☆ 竜虎の戦い（早川博さん） 杉森 裕・田中星路

石川真夕・下河内清夏・藤掛奈月

上地町字下屋敷の早川さんのお宅には、虎の絵がある。これは、早川家六代目の斯伊熊助さんが描いた。竜は無禿寺の天井に描いてある。竜は天の神様とされ、虎が地の神様とされていた。ある日、天と地の戦いが起こり、畑がめっちゃくちゃになった。そこで、虎が抜け出さないように左目を塗って、目つぶしの方法を村人が考えた。それからは畑が荒らされなくなっただけという。

他にも早川さんのお宅の回りには、樹齢三百年以上とされるモチの木がある。岡崎の名木にも選ばれている。また、下屋敷とは、岡崎のお殿様がくつろぐ場所という意味があることがわかった。

地域の方にお話を伺っていると、その土地柄にあった字名があり、意味を調べていくうちに興味が湧いた。



〈藤六の地蔵と畔柳市太郎さん・星野ときさん〉

☆ 上地の字々名にはこんな意味がある

馬乗(まのり)・・・田畑を耕し、荷物を運ぶのに馬はなくてはならない大切なもの・馬に乗って歩いた道。
馬不入(うまいらず)・・・馬乗までは馬が通っていたが、ここは馬が入れないくらい山の山だった。
堤ヶ入(つつみがいり)・・・大谷池が近くにあり、この辺りは池の縁だったから。
上大谷坂(かみおおやさか)・・・馬頭に通ずる細い道が山道で、上り坂が多かった。
向畑(むかいばた)・・・西には家があり、その東側(向かい)には畑がたくさんある。
西三田ヶ入(にしさんたがいり)・・・西三田ヶ入という池があった。
藤六(とうろく)・・・昔、大見藤六という人のお屋敷があった。
薬師(やくし)・・・昔、薬師たちが住んでいた。
下薬師(しもやくし)・・・薬師たちが住んでいた下の方。
八門(ようかど)・・・お屋敷があり、八つの門があったから。
芋田(いもだ)・・・里芋を作っていたたんぼがあった。
屋敷山(やしきやま)・・・山の上にお屋敷があったから。
下屋敷(しもやしき)・・・岡崎のお殿様がくつろぐ場所
山ノ上(やまのうえ)・・・この辺りは山が高かった。
山ノ田(やまのた)・・・この辺りは山が多かった。
向山(むかいやま)・・・山と山が向かい合っている。
岳井(がくい)・・・岳というのは大きな山という意味がある。



<下河内 清夏>

☆ 学子羽白発表会△△にむけて

これまでのふるさと学習を通して、地域の方との交流が深まるばかりか、子供たち一人一人の、普段の授業では見られない姿を見つけることができた。調べ学習だけでは納得できなくて、祖母宅に電話をしたり、寂靜寺までわざわざ足を運んだ子もいた。翌日、自信を持って発表していた姿が忘れられない。このように、上地について少し興味が湧いてきた矢先、教頭先生が、命を捨てて戦友と潜水艦を救った成瀬正男兵曹のことを、授業で話して下さった。それを聞いた子供たちは、成瀬さんの勇気と決断力に深く感動した。早速、幼なじみの小林茂さんをお招きして、成瀬さんの子供時代のエピソードをお聞きした。福岡尋常小学校時代、成瀬さんと小林さんは名簿順が続いていたことから、一年から六年まで一つの机に二人並んで勉強していたこと。成瀬さんは、子供の時からまじめで働き者だった。忙しい時には、昼ご飯を食べる時間が惜しくて、朝ごはんを食べると一日中働いていたこと。ある日、たき火をしていてわら束に火が移りそうになった時、とっさの判断力で火事を防いだこと。徴兵検査で、成瀬さんは甲種で合格して、海軍に入隊したことなどを伺った。

学習発表会には、「ふるさと上地学習―勇気の人 成瀬兵曹」を演じようということになった。代表の児童が成瀬キミさん宅で、結婚生活や海軍に入隊してからのことを伺った。また、当時の写真を見せて頂いた。心に残った話をプロットとし、脚本作りが始まった。しかし、いさ番こうと思うと、どんなふうに話していたのだろうか。海軍ではどんな訓練をしていたのだろうか。潜水艦での訓練はどのようなものか。など、さまざまな疑問点がわいてきて、子供たちも私もベンが止まった。

そんな時、ちょうど真野君のおじいさんである、畔柳文男さんが海軍にみえたということを知り、子供たちが手旗信号の訓練の様子を聞いてきた。また、加藤米太郎さんも海軍の生証人だということを知り、知らないお宅までおじゃましという。私自身、子供たちの行動力には感心させられた。こんなに頑張って脚本作りをしているのだからぜひとも劇を完成させたい。キミさんや小林さんに喜んでいただきたいという思いが日ごとに強くなってきた。私も子供たちに負けてはいたら

れないと思ひ、若松東の花田さんに潜水艦の本をお借りしたり、市の図書館にも出向いた。普段見ないビデオも、海上や潜水艦に関係のありそうなものを見た。こうして2学期から冬休みにかけて、やっと脚本が完成した。

①ふるさと学習のまとめ ②成瀬さんの子供時代 ③徴兵検査と海軍の訓練 ④戦友と潜水艦を救う場面と、四部構成にした。子供たちも四つに分かれて、それぞれチーフの子を中心に、せりふをつけ加えたり振りつけをした。今年は特に、風邪が流行して欠席する子が目立ち、どのクラスも練習がはかどらなくて苦しいようだった。しかし、自分たちの場面は自分たちで作る、という思いが強かったので、欠席も少なく、練習できなかったことはない。第一場面のナレーターの子らは、せりふが長いにもかかわらず、誰が休んでも他の子が代わって言うことができた。大人にはない、頭の柔軟さに頭が下がる思いであった。

演技指導では、第四場面の成瀬さんがハッチを閉めて流される所が、最後までじっくりいかなかった。一場面が五分であるために、気持ちが盛り上がっていく前にあつという間に流されてしまう。毎日のようにせりふや振りつけを変えていった。校内学習発表会が近づくと、まだ思うようにできない焦りを感じた。何度か子供たちと練り直すうちに、やっと校内学習発表会で、やり終えた後に何か心が熱くなるのを実感した。また、本番は小林さんや成瀬キミさん、その他学区の方々の見守る中で最高の演技ができた、子供たちをほめた。



〈心をひとつにして「ふるさと」を歌う〉



（ご父兄からの手紙）

上地のことなど何も知らなかった私たちに、上地小に入学してから子供を通して

いろいろ教えてもらうことができました。ふるさと上地を前向きに純粋に見聞きし、勉強させて頂いたお陰で、大人の私たちもこんなにも身近に、まるで昔からここで生活してきたふるさとのような気さえます。特に六年一組の皆さんが取り組んできたふるさと学習は、この学習発表会ですばらしい結果となって発表することができたと思ひ、とても感動させられました。

★ ふるさと学習を通して、上地学区を大切に思う気持ちや、人を思いやる温かさに触れることができた。また、子供たちにも、思いやりの心が育ったように思う。ひとつのことをなした喜びが、皆の心をひとつにした。（高橋）

艦長
水の二等兵
成瀬
艦長
くるみや一等兵
成瀬
艦長
中田三等兵
ナレーター

△全員、潜航配置について排水せよ。

だめです。主水管が故障して、排水できません。

艦長、すごい荒れ具合です。昇降口から海水が入ってきました。

成瀬、ハッチを閉めるんだ。

もうだめだ。どんどん水が入ってくる。このままでは沈没してしまうぞ。

（とっさにハッチの外に出る。）よし、外から閉めるしかない。（流される）

成瀬、何をするんだ。流されてしまうぞ。中に入れ。

成瀬。お前死ぬ気か。成瀬。皆、思い思いに叫ぶ。

成瀬兵曹は、艦内からハッチが閉まらないと直感し、自分の身を捨てて潜水艦の窮地を救ったのです。間もなく、潜水艦は浮上して捜索を始めたのですが成瀬兵曹は海の中へ消えていったのです。

いい顔・いい姿勢

一、めあてをもつて

平成六年度は、昨年度より二学級増の二十八学級、九七四名、教職員三十九名でスタートしました。現在一年生一七四名も元気に登校しています。新しく上地小に赴任された五名の先生方も張り切っています。

四月十四日、学級写真を撮りました。新しい仲間たちで、緊張の中にも、一つ上の学年に進んだという意欲を見せてくれました。みんな、いい顔いい姿勢でした。今、ここにほくが、私がいるぞという姿です。今の気持ちをずっと持ち続けて欲しいものです。

今年のめあてをしっかりと考えている子も大勢います。

「僕は算数が苦手だから、しっかりとやりたい。」「友だちをたくさん作りたい。」

「ソフト部で力いっぱいやりたい。市内で優勝したい。」

「委員会活動で計画を立てて、みんなに役立つことをしたい。一年生を迎える会、楽しい会にしたい。」
下学年らしさ、上学年らしさが、それぞれ出ています。めあてに向かって努力する時、その子に輝きが見られます。

二、校務員作業班のみなさん、ありがとう

南舎と北舎の廊下壁面が見違えるほどきれいになりました。六月十四日に本校の研究発表があります。子供たちの学習の様子を岡崎市内の先生方に見てもらいます。学校ができ十一年が過ぎ、廊下壁面が汚れてきました。教育委員会にお願いたしたところ、校務員作業班の方が四名来て頂きました。南舎と北舎すべての壁となりますと、かなりの面積となります。春休みから

四月いっぱいかけて、きれいに塗り替えてくれました。子供たちも廊下が明るくなって、大変喜んでいます。子供と共にお礼を申し上げます。

三、水車が回る

上地っ子風車「びゅう太君」の電気により、なかよし池で水車が回りました。三月十九日第十一回の卒業生が巣立つ日、待望の水車が回り、子供たちとの約束を果たすことができました。自転車の前輪に竹で作った水受け部分を取りつけた小型なものですから勢いよく回ります。回転によって、放射状に水しぶきが生じそれが池の水面へ落ちていきます。コイたちも喜んでるようです。

上地っ子風車の電気によって回るところがいいです。風車から池までの配線では、学区の松田電気さんにお世話になりました。次のような経路で水車が回ります。

- ①上地っ子風車で発電する。バッテリーでたくわえる。
- ②その電気で、エアポンプを働かし、池の水を吸いあげ、水路に流す。
- ③水路の水は、一部は噴水用に、他はさらに水路を通して水車に当たる。
- ④噴水や水車を回した水は、再び池にもどる。このとき、水面から空気が入って酸素補給の働きをする。

今は小型ですが、やがては本物の水車を回してみたいと思います。

学校環境を田心う (その一 校舎外環境)

環境は人をつくると言われます。環境は知らず知らずのうちに良しにつけ悪しきにつけ私たちに刺激を与えます。それだけに学校の環境は意味を持ちます。上地小学校には、先輩の皆さんや学区の皆さんのご支援によって子供たちに刺激を与えているいくつものすてきな空間(場所)があります。その主なものをあげてみます。

一、歴史と文化を語る

- ①とべ上地っ子・足でとべ、腹でとべ、頭でとべ(創立五周年記念像)
- ②ふる里上地・人生は一度、ふる里は一つ(十周年記念像)
- ③友情の松・(福岡小、岡崎小から分離独立し上地小学校ができました。福岡小から送られました。)
- ④校訓「力いっぱい」を示す大型エンピツの塔と学校行事掲示板・毎朝登校時に目に入り、今日も頑張ろうという気持ちが生じます。

二、自然と対話する

- ①桜と花水木とメイン花壇
- 天皇陛下御下賜金による桜の木(真緑化大会)と通路をはさんで北に位置する花水木(日本とアメリカの国花)それぞれの美しさを体感できます。



体育館南側のハナミズキとメイン花壇



メイン花壇では四季の草花が語りかけてくれます。
②なかよし池とこい

国旗掲揚塔の周囲を取り囲むように造られた池に、こいが約八十匹泳ぎを
楽しんでます。(上地区画整理組合事業完成記念)

③ふれあい牧場のヤギとチャボ

トカラヤギ(雌一頭)、ヤクシマヤギ(雌一頭)とその赤ちゃん。(五月
誕生)さらにチャボとニワトリが十数羽います。チャボ、ニワトリは放し
飼いになっていて、大きく三グループに分かれています。同じグループで
は、つっきの原理により順位が決まっています。ジャングルシムの中で
夜を過ごしたり、花壇で砂浴びするなど、小屋の生活では見られない姿が
いくつも見られます。

④風力発電機「びゅー太君」となかよし池の水車

風に向かって元気に回転、電気はバッテリーに蓄え、エアポンプを働かし
て池の水を吸い上げます。それを水車にあてると水車が回り水しぶきが飛
び池のこいが喜びます。

三、遊びながら体をきたえろ

①レインボータワー(コンビネーション遊具)と上地ランド(砂山)
のぼったり、おりたり、ぶらさがったり、すべったり楽しみます。



土 ぎ 土 ぎ 上 地 つ 子

一、実践報告会七百名余の参加に感謝

六月十四日、「学級づくりを基盤とした学習指導」をテーマに本校実践報告会を開催しました。岡崎市内外の先生方、保護者のみなさん合わせて七百六十名が公開授業を参観され、五百名余の方が研究協議会に参加頂きました。本校が創立以来大切にしている「生き生きとした学習」を継承し実践してきました。そのため、歴代校長先生より助言・指導をいただきました。不易と流行という言葉がありますが、良いものを受け継ぎ深めていきたいと思えます。また、社会の変化も激しく、それに対応する能力や、生涯学習の基礎を培う必要性を感じ読書指導にも力を注ぎました。

大勢の先生から感想ご意見をいただきました。

「学級が温かい雰囲気であふれていた。」「一人ひとりが素直に発言したり発表できて、それをお互いが受け入れながら深めようとしている。」「読書指導が学級づくりや授業に生きているように思います。読書環境ができています。」「

実践要項の内容について、愛知教育大非常勤講師近藤克実先生から次のような感想をいただきました。

「私にとって魅力だったのは、学級文化の創造です。学校文化は伝統として積み上げられますが、その根底にあるのが学級文化であると思います。組が変わらなければ一年間の成果が次年度に即生かされるが、たとえ組が変わっても、それは別の形で生かされていくでしょう。学級文化はあくまで教師サイドの言い方、子供自身がこの文化に値するものをどのように捕らえているか知りたいものです。学級文化が地域の文化と結びついて、子供は学区から、学区は子供からお互いに学び合っているでしょう。学校の文化の集積が研究発表会ではないかと思えます。」「

大切なアドバイスとして今後に生かしたいと思えます。

学区のみなさん、PTAのみなさんの支援があつて、実践報告会を持つことができました。心からお礼申し上げます。

二 子供による子供のための上地っ子文化祭

代表委員会主催による上地っ子文化祭が六月二十七日に行われました。四年以上の各クラスが、それぞれ知恵を出し合って教室ごとに発表、展示コーナーをつくりました。学区の動植物など生き物に関するもの、大昔の生活や遊びを再現したもの、さらに時代をさかのぼって恐竜の世界を表したもの、また学習発表としての県・日本の地理に関するクイズ、算数おもしろクイズ、すみ絵を描くコーナーやさらに迷路とクイズのコーナーなど楽しむコーナーもありました。計画から準備、当日の割り分、片づけまですべて子供による活動です。先生は側面から支援する立場にいます。毎年上級生のコーナーを見ているのでどの学級も創意と努力のあとが見られました。一年生から三年生までは上級生と交流昼食会を持った後、見学に出かけます。人気のあるコーナーでは長い行列になります。四年以上の子は時間を決めて、交代で他の学級を見学しました。

PTAサークル活動の一つである「生活を語る会」のメンバーが写真取材してくれました。その時の感想です。

「上地っ子文化祭は、他の行事と異なって、子供たちが考えたことが実際のものとなる楽しさがあります。ぜひこの活動を続けてほしい。」「高学年の子が低学年の子にいろいろ説明したり世話をしていた。子供の手作りは本当にいいです。」「先生方のバンド演奏とてもよかった。」「四年生は初めてなので今少しというところですが、五年生六年生のアイデアはさすがだなあともしました。」「子供たちの顔が生き生きしていて、自分たちで活動しているのが見られました。」「子供たちが普段できなかったことをのびのびと取り組んでいたと思います。」「迷路は良く考えて作ってありました。少しスムーズに進行できたと思います。」「想像していた以上に良かった。もう少し時間が長いといいです。」

子供たちの生き生きとした姿を写真に撮っていただき、秋の文化展に出品されるとのことです。この自主的活動こそPTAの精神として嬉しく思います。子供たちや、当メンバーのみなさんの感想を今後に生かしたいと思います。

自分の目標を持って

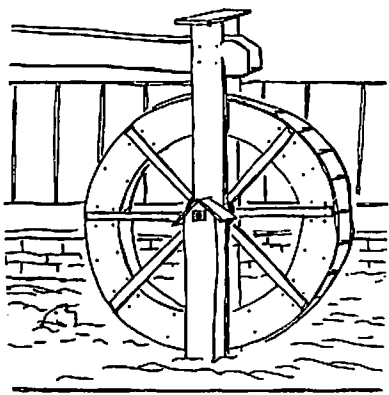
一 なかよし池に本物の水車が回る

この七月は暑い日が続いています。水不足で子供たちもプールに入れず残念ですが、自然の力にはどうしようもありません。この機会に水の有り難さをお互いに学びましょう。

一時なかよし池の循環装置の調子が悪く、この暑さで大量に藻が発生し心配しましたが、現在は故障が直り調子を取り戻しています。藻も薬品によって見事に消滅しました。

なかよし池のこいたちに新鮮な空気を与えようと、水車や小型噴水で水面に変化を与え、空気補給を考えていましたが、この七月はどうも風が弱く、風力発電機による発電が不十分でバッテリーも上がった切りです。そこで、安全性を考えて、なかよし池を循環している水の流れを利用して水車を回すようにしました。それも本物の水車が風に関係なく常時回ります。学区の松田電気さんと幸田の三浦大工さんの協力で足助屋敷にある水車と同じタイプの水車を作っていただきました。これは、PTAと名古屋銀行さんの支援によるものであります。

直径一メートル二十センチの水車がゆっくり回ります。池に循環する水路の一部を少し高い位置に移す工事が残っていますが、こいのみなさん、児童のみなさん、もうすぐですので楽しみにしてください。



二 恩師山本忠男先生より図書への寄贈

本校が図書館教育で頑張っていることを耳にされ、恩師山本先生が上地小の子供たちの読書指導にと、先生が蔵書の中から児童向けの図書を選び出し五百冊余りを寄贈してくださいました。

山本忠男先生は、私が養中学校三年生の時の担任の先生で、卒業以来現在まで四十年経過しますが、その間もお世話になりご指導をいただいている先生です。

いただいた図書は低・中・高学年の発達段階を考慮して分類し、現在学級文庫として利用させていただいています。山本先生ありがとうございます。

こうして、学区のみなさんを始め、多くのみなさんからご支援をいただき、有り難く思います。

三 一球一球に入魂の上地っ子

岡崎市小学校球技大会が七月二十一日より二十五日まで各会場に分かれて開催されました。ソフトボール男子、バレーボール男女、バスケット女子、サッカーの五種目が本校からの出場です。

選手のみなさんは日頃の練習の成果を遺憾なく発揮して戦ってくれました。一戦一戦に全力を注ぎ、その姿は気力あふれ、堂々としたものでした。一朝一夕で得られるものではありません。技術・知恵・体力・精神力の総合力の戦いです。保護者のみなさんの応援もあり、選手のみなさんは一層勇気づけられ頑張りました。次の三種目で入賞を果たしました。

・サッカー —— 優勝

・バレー(女子) —— 準優勝

・バスケット(女子) —— 準優勝

バレー男子は東海四県小学生大会で三位入賞を獲得しました。水泳大会は水不足のため残念ですが中止になりました。

やいぬいた時の喜びを

一 夏休みの体験を生かして

① しばらく中断されていた子供会主催学区花壇コンクールが、本年再開されました。九月十日、審査員の方と一緒に九つの花壇を見させて頂きました。花壇の広さは、一つの町を除いて一定でありますし、花の種類も市から配布されたサルビヤ、マリーゴールドなど種が決まられていますので、花の育成状況、花壇のレイアウト、そして参加・活動状況などがポイントになります。どの町の花壇も、テーマを考え、なかなかの出来栄でした。

「僕たちの花壇は、五月一日に種をまき・・・」と、B紙にぎっしり書いた経過報告に接しますと、一瞬姿勢を正します。今年水不足で、花壇への水やりも苦勞があったと思います。一学期と長い夏休みを通して、子供会の世話係の方と子供たちの一体となった頑張りがあったことを痛感しました。子供たちは、きつとたくさんのお話を学んだことでしょう。花壇の立派さもさることながら、親と子が協力し合い、目標に向かって力いっぱい姿に意欲を強く感じました。

② 九月五日から一週間、夏休み自由研究の作品展を各学級で行いました。

一、二年生は工作物、三年生以上は工作物以外に、理科や社会など学習の発展としての自由研究をB紙にまとめて展示しました。何を調べようか、研究テーマを決めるのも大変ですが、それを自分の考える方法で、自分の力で観察したり実験したり、製作したり、あるいは図書で調べたりします。どんなテーマでも自分の頭と体で追求したところがいいです。

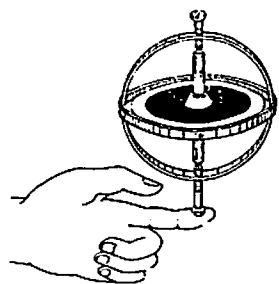
こんなテーマがありました。「塩の結晶作り」「どれが一番冷たいかな(ジュースの保温)」「麺ののび方」「紙による水の吸い上げ方」「とうふの浮くわけ」「アリと玉ねぎ」「真夏の車中の温度」これらは毎日の生活の中からテーマを見つけて研究しました。「水の中の微生物」「砂川調べ」「やな川と砂川の水」等は学区と結びついて郷土を知ることが

できます。「再生紙の研究」「家庭で使う水の量」「酸性雨について」「ろ過器の製作」などは、地球の環境を思う気持ち
が伺われます。「科学衛星について」「エネルギーと発電のいろいろ」など図書を活用した研究もありました。それぞ
れの作品に努力のあとが見られます。

異色なものに「ビールと体」がありました。お母さんにビールを飲んでもらい、ビールを飲むと血圧や脈拍がどのよう
に変化するかを調べたものです。飲み始めは血圧が上がるが、やがて少しずつ下がっていく。脈拍は飲むほどに上がって
いき、途中で運動をする(ジョギング一分)と、一段と上がったとまとめている。四年生の学習に、人の体について、運
動と心拍数、脈拍、体温などの関係を学習するところがあります。その発展として調べたことと思います。多くの家庭で
お父さんやお母さんの協力、助言があったかと思えます。今後も、子供たちの自主性を大いに喚起して頂くようお願いし
ます。

二 地球ゴマのふしぎ

九月に入って、九区の柴田昭三総代さんが地球ゴマをプレゼントしますと学校に見えました。
大中小二個ずつ合計六個いただきました。お話を伺っていると、総代さんのお父さんが若い時に
この地球ゴマを考案されたという事です。すばらしいことです。普通のゴマは回転軸が直接床
に接していますが、地球ゴマの回転軸は外のわくに支えられて回転軸が直接床に触れていませ
ん。それなのに安全性豊かで、床はもちろん、手の上でも、とがった鉛筆の先でも、さらに、張
ったひもの上でも回転を続けます。早速校内テレビ放送で子供たちに知らせ、渡り廊下で遊ぶこ
とができるようになりました。子供たちは興味を持ってゴマを回しました。このような体験を通し
て科学する心の芽が育ってくれたらと思います。今は亡き、柴田総代さんのお父さんに敬意と感謝を申し上げます。



本読めばワクワクドッキン

夢のジャンゲル

一 読書で心豊かに

読書の秋です。十月中旬から一か月間が読書月間です。図書委員会が読書月間にちなんで読書標語を募集したところ、楽し
いものが寄せられました。見出しの言葉もその一つです。四年生の金森美千子さんの作品です。その他の入選作品も一部紹介
しましょう。

- ・ 気がつけば アリスと一緒に 冒険中 (六年 稲吉可奈子さん)
 - ・ 読書の秋 いっぱい読んで パワーアップ (五年、小島史泰君)
 - ・ 本の中 きらめくことばが いっぱいだ (五年 松田幸子さん)
 - ・ 本を読む 親と子どもの やさしい目 (五年 阿知波裕君)
- なかなかの出来栄です。

本は友達です。自分が本の中の主人公になったり、よき友達になったりします。今まで見たこともない、聞いたこともない
未知の世界に入って、すばらしい体験をすることができます。

読書目標は、一・二年生が二十冊で、三年生以上は好みの本を合計千ページ読破です。子供たちの様子を見ていますと、か
なりの子供たちが達成できそうです。図書館の本の貸し出しも順調でありますし、移動図書館のあおい号が来ますと「学級文
庫です」と言って小わきにかかえて数十冊を借りていきます。

読書指導部の先生方を中心に全職員と図書委員会の子供たちが協力して、読書環境づくりに知恵を出し合っています。

・ 読書新聞募集・・・作者について調べたこと、本を読んだ感想などをまとめます。

・見つけたよ、調べたよコンクール・・・学習課題を本や新聞などで調べたこと、自然の観察で見つけたことを書きます。
・親子読書のすすめ・・・親子で十分間以上の読書をすすめます。

・読書感想文はがきの応募・・・指定図書を読んで感想をはがきに書きます。

・先生の読み聞かせ・・・お昼の放送を活用してすすめたい本を紹介しします。

・読書集会・・・学年ごとの人気の本を紹介しします。また、読書の感想も発表しします。

先生方の昼の放送での読み聞かせ後、子供たちは大いに刺激を受け、紹介された本を読んでいます。子供たちに人気のあった図書は次のようです。「なん者にん者めん者」「ぞうのババール」「かいぞくポケット」「バケちゃんシリーズ」「ヘンリーくんシリーズ」でした。

二 国体マゲーム「岡崎の四季」に大拍手

わかしやち国体アーチェリーの開始式で上地の六年生が他四校六年生と計六百七十人で心を合わせて、集団演技「岡崎の四季」を披露しました。岡崎城と桜の春、岡崎の大花火の夏、男川とススキと赤トンボの秋、滝山寺鬼祭りの冬、この岡崎の四季を集団の「静と動」で見事に演じました。鈴木尚子先生をリーダーとした先生方の演出の創意と工夫、それを支えた六年担任の先生方、そして、期待に見事に応えた子供たちに大きな拍手が送られました。「よかった」「よかったね」と涙ぐんでささやいていた方も大勢いました。

三 上地っ子水車の愛称は「くるるちゃん」に決定

約五百点の応募の中から二十点を選び、先生方のアンケートによって入選三位までを決定しました。第一位は「くるるちゃん」、第二位は「くるりん」、第三位は「すいすい君」でした。その他には「くるる君」、「くる太」、「くる太郎」、「すい太郎」などがありました。上地っ子風車が「ビュー太君」なので、水車の「くるるちゃん」はよい対になりました。

みんなのために、ひとりのために

一、修学旅行で思うこと

六年生が去る十一月二十四日から一泊二日で奈良・京都へ修学旅行に出かけました。小学校の最大の思い出となる大きな行事であるだけに、六年生担任も事前指導をていねいにして臨みました。身体の調子が十分でない児童もいましたので、家庭との連絡を密にして、何とか全員参加で行けるよう願っていました。体調の悪い子の中に骨折して退院はしたものの歩行できない子がいました。医師から車いすでの参加ならよろしいという許しが出たので、ご両親に相談して、父親が付添い、みんなで協力体制を取ることになりました。お父さんも大変であります。バスの乗り降り、改札口を通ってからホームへの移動、見学地での移動等よく頑張って頂きました。お父さん以外にも協力していただいた方がいます。JTBの方、JRの駅員さん、新幹線ホームへのエレベーターの手配、見学地では、特別に出入り口を配慮、旅館でのエレベーターの配慮、部屋の配慮等々数え上げると、かなりの人と関係機関の協力がありました。多くの皆さんのお世話と協力で無事修学旅行を終えることができました。お父さんにとっても、子供さんにとっても、良かったことであり、応援したクラスメイト、担任、六年全担任にとっても嬉しいことでありました。本来の歴史・文化の学習に加えて『みんなで生きていく』という大切な学習ができたことに感謝したいと思います。

六年生が出かけたこの二日間、五年生が頑張ったことを知りました。すなわち、五年生が通学団の班長の仕事を責任を持ってなし遂げたこと、六年生の清掃区域を分担して頑張ったこと、また、六年生の各教室に〃六年生修学旅行お帰りなさい〃と心を込めて板書してくれたことであります。六年生がいない時は、ぼくら、わたしが守りますという気持ちで生活してくれたことを嬉しく思いました。お互いに心を通い合わせた修学旅行であったと思います。

二、学校五日制について考える

新聞でご存じのように、月二回の学校五日制の実施が決まりました。平成七年四月から第二土曜日と第四土曜日が休業日となります。学校としても家庭・地域としても考えていかなければならないことがいくつか出てきます。まず学校として考えていることは、土曜日の授業を三時間、年間二十五週の計画で、その半分の約十八週で、五十四時間の授業が減ることになります。学習内容は変化がないので、各教科の時間を減らすことは大変であります。また、この時間を、他の五日間の授業に加えて実施することも一日の予定からして無理があります。これらを考慮して、今までの学校行事を見直していくことがまず考えられます。学芸会や運動会など練習の時間のかかるものを本年度は一回で実施しました。このような行事の統合も考えたいと思います。学期ごとに大掃除の時間がありました。これもなくし、その代わり、通常の清掃時間帯の中で、学期終わりに清掃週間と銘打って、一週間のうちに大掃除に匹敵する効果を持つようにもしてきました。若干学級の時間が(ゆとり)の時間が減っていきますが、その分学習の仕方では効果が上がるよう努力していききたいと思えます。充実した、しかも効率の良い学習のために①基礎・基本を重視②指導の焦点化と指導計画に軽重を考える。③学校行事と教科との関連を探る等考えます。

さらに、学校と家庭・地域の両方で考えたいことは、体験的な学習や問題解決的な学習を大切にしていきたいということです。これからの社会に自ら対応できる能力の基礎を培う意味から、自らわらい(課題)を持って活動すること(作る、やってみる、調査する、まとめるなど)興味・関心のあることを続けていくこと、親子、子供どうして楽しめたり、協力し合ってできることなどを採っていききたいと思えます。例えば、十一月の授業参観での親子工作に見られたように、家庭でも一つのことを協力して作り上げたり、発展させて頂ければ幸いと思えます。意味のある五日制になるよう、ご意見をいただければと思います。

子どもと廿六は、子どももの心を

一、連日の痛ましいニュースに接して

いじめられる子は、通常、気持ちのやさしく、身体的にも精神的にも自己主張の弱い子です。反論したくても、やさしさのため他人を責めず自分を責めます。自分のみじめさを誰にも言えず、自己否定へと落ち込んでいきます。真っ白な空虚な世界へ入っていきます。

情け容赦なくいじめ続ける子どもたちの気持ちはどうでしょう。いじめられる側の気持ちと裏腹に、いじめる側は、見てみると面白いという感覚があります。一人ではできないことが集団となるとできてしまいます。一人の声にプラスαが加わって勢いがつき、エスカレートします。理性や人間性がなくなっていくます。ここに集団の怖さがあります。

学校として、教師として子どもの世界、子どもの心をもっと知らなくてはならないと思えます。いじめられた子ども、いじめた側の子とも、面と向かった取り調べ的な接触でない、日頃からの人と人の心のふれ合う結びつきが大切であります。そうした中で、少しでも心身共に健康で感受性の高い子どもに育てていきたいものです。このことは、家庭においても同じであります。一日の時間帯の中で家族が同じ部屋で語らう場が必要であります。また、共に汗を流す体験も大切です。父親からは生き方に対する勇氣、正義、善悪、信念などが教えられるといいと思えます。また、母親からは、やさしさ、おもいやり、信頼などが教えられるといいです。

誰が悪い、よいということではなく、学校、家庭、地域それぞれ現状を反省し、できることを見直し、連携協力して当たらなければと思います。学校も全職員で全児童を育てるの気持ちで頑張ります。

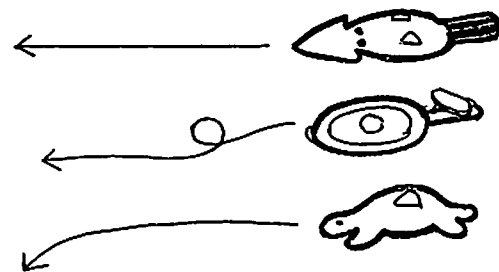
二、飛べ 発砲スチロール飛行機

四年生の親子工作で、発砲スチロールの飛行機を作りました。厚さ一センチの発砲スチロールを使って、形をきめ、カッターナイフで切っていきます。工作でありますので、形のアイディア、色つけのアイディアなどが大切です。また、飛ぶこともひとつのわらいでありますから、重心をどこに置くか、尾翼の形をどうしようかなど考えていきます。実際のようには飛ぶのか、やってみないとわからないので、だいたいの形ができたところで飛ばしてみます。いろいろな形の飛行機ができてきました。子どもが主体で保護者の皆さんが助言しています。何とも和やかな雰囲気です。四年二組の作品で特徴のある飛び方をした三つを紹介しましょう。

①イカの姿をした飛行機で、羽根啓介君の作品です。機幅二十センチ、縦幅四十センチの細長い形です。重心は、中央よりやや前方にあり、まっすぐよく飛びます。

②次は、目玉焼きの図案でフライパン型の、鈴木哲司君の作品です。ほぼ円形です。フライパンの取ってのところが尾翼になっていて、重心がほぼ中央にあります。まっすぐとび途中から後方が下がり速度が減って尾翼から着地します。少し勢いよく飛ばしますと尾翼から一回転し着地します。高いところから飛ばせば、うしろ一回転着地もできます。

③三つ目は、カメさんの図案で佐藤隼人君の作品です。前方に向かって右側が背中、左が足になっています。左右対称ではありません。重心は中央よりやや前方にあります。左側の足の部分に空気抵抗があるのか、飛ばすと左へゆるやかなカーブを描きながら飛んでいきます。三種三様であります。重心の位置を少しずつ工夫をして飛び方の変化を調べてみよう。飛ばす方向や初速によっても変わるでしょう。親子で挑戦してみてください。



イ 年 を 迎 え て

— 小さな夢を一步一步 —

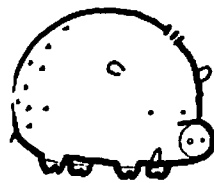
本年は上地学区・学校が創立して十三年目にあたります。十年を一区切としますと新たな三年目として大切な時期であります。学校としては、学区並びに保護者のみなさんと連携を深めながら大きく二つの課題に取り組みたいと思います。

一つは、平成三年度より継続研究している図書館教育の充実です。生涯教育の基礎を培うために、豊かな心を育てる読書指導と調べる能力を高める利用指導の両面をめざし頑張りたい。

二つ目は、学級文化の創造です。それぞれの学年・学級でテーマを持って取り組んでいます。郷土の歴史・文化・自然等の中から探究できることを決め年間を通して取り組みます。教科学習と共に、その過程で、学級のまとまりや人間関係を深めることができたいと思います。

環境と人間・人間と人間との関係を大切にしていきたいと思えます。

(東海愛知新聞年頭あいさつ)



明けましておめでとうございます。昨年は、学校と子供たちが大変お世話になり、ありがとうございました。国体マッスゲームに六年生が参加し、力いっぱい演技ができた大きな拍手をいただきました。生涯のよき思い出となることと思えます。

さて、上地小学校には、チャボとにわとりが三十羽ぐらいおります。放し飼いになっております。子供たちは大変仲良しであります。仲良しでいろいろな勉強になります。えさの食べ方、飛び方、ジャンプルジムへの昇りかた、砂浴びの様子などいろいろな勉強になります。仲良しで良いのですが課題もあります。まず、えさ代が馬鹿にならないということです。また食べることに伴って、ふんも多いということです。ジャンプルジムで夜を過ごすものが十三羽ぐらいますので、ジャンプルジムが大変汚れます。一日だけなら良いのですが毎日毎日のごことでありますので掃除の子も大変です。動物が生きていくことは、どういうことなのか、子供たちと一緒に考えていきたいと思いです。動物とその環境、人間と動物との関係、人間と環境等について学習を深めようと思います。本年もよろしくご支援、ご指導をいただきますようお願い申し上げます。

(学区新年交礼会あいさつ)

子供たちに科学への目と心を

現在上地っ子風車が風に向かって元気に回っています。この風車も季節により、また日によって回り方は異なります。常時なかよし池に噴水を上げるだけの力がありません。風のない時にも電気を起こすには、太陽電池がよいでしょう。風力発電も太陽電池による発電もクリーンなエネルギーとして価値があります。この両者の力で常時噴水を上げてみようと思います。松田電気さんから助言をいただき、科学クラブの子供たちと一緒にこれからの構想を練っていこうと思います。みなさんからの情報・ご支援をよろしくお願い致します。

学級文化の創造それぞれに花開く

本年度も、それぞれの学年・学級で一つのテーマを持ち、学期あるいは年間を通して追究する姿が見られました。その追究の過程で、友との協力を学び、取材活動を通して、先輩・後輩、そして学区の人々との交流の喜びがありました。学級のテーマは、学区の歴史、文化であったり、自然であったり、また、表現活動としてリズム運動、詩づくり、また読書活動であったりしますがある期間継続することによって活動と内容が深まったり、広がってきました。一月末に開催した学習発表会でも、こうした各学級の成果が少しずつ取り入れられ、その一部が紹介されました。

ふるさと上地の学習を進め、学区の偉人として取り上げた「勇氣ある人・成瀬兵曹」の劇化は、事前調査、取材活動、シナリオ作り、演出の工夫など学級文化活動として質の高いものと考えます。(六の一)

また、日頃の読書活動の集大成として「斉藤隆介の世界」(花さき山・猫山・ペロ出しチョンマ)の歌と劇は高い評価をいただきました。(六の二)

さらに、体育指導の一つであるマット運動とリズム体操をうまくミックスさせた「はつらつ六の四」も今までの学芸会に見られない表現活動として個性的でありました。(六の四)

年間一人一研究をテーマに、自分の調べたいことを探り、その課題を図書館の本で調べたり、取材活動を進めたり、あるいは観察実験をして考察し、これを数十頁の論文としてまとめ上げる活動を進めた学級もありました。その学級の中から見事、全日本小中学校作品コンクールで優秀賞(石川友香さん)を受賞するなど嬉しい成果もありました。(六の三)

学級文化の創造は、六年以外の学級でも取り組んでいます。五年の学級では、朗読、詩の鑑賞、詩づくりを年間計画で位置付け、一步一步取り組みました。詩を作ったことの少ない子供たちが二学期には次のような詩を作っています。(五の四)

なればかたん

市瀬 寛之

さいほうなんて

なればかたん

指にまいて

よじって きゅっ

たまむすびなんて一秒だ

さいほうなんて

なればかたん

はり当てて

くるくるまいてぐつとぬく

たまどめなんて一発だ

母の手

高島 康則

母の手はあたたかい

母の手はどうして

そんなにカサカサなんだろう

いっぱいお皿をあらったり

いろんな野菜を切ったりするからだ

「さわってもいい。」

「うん、いいよ。」

やっぱりカサカサ

苦しさが伝わってくる

でも

やさしさが伝わってくる

だから

母の手はあたたかい

はばとび

曾我 麻絵

地面をけると

土がちらばる

サザッ

火花がはじけたみたい

片足でふみけって

手をプーンとあけて

ふりおろす

えびになった気分

ザポッ

くつの中に土がはいる

土なのに大きなみみが

はいつてきたみたい

とべた

二メートル八五

きれいな形の

えびになったよ

上記、市瀬君と曾我さん

の作品は、朝日新聞の

「小さな目」に掲載され

ました。

低学年で二フトリをひなから育て、現在立派な若者に成長させた実践などあり嬉しい限りです。(二の二)

それぞれの学級の文化が、それぞれに一つまた一つと花を咲かせています。学級の個性、一人ひとりの子供の個性を大切に
して今後も頑張りたいと思います。

六年生の一か月

三、教室の窓



六年生の一か月

六年担任 高橋 由美子

● 四月十八日 学級開き

新しい学年、新しいクラス。担任も子供たちも緊張の一日である。昨年度担当した学年で、どのクラスの子供たちとも交流があったはずなのに・・・クラスの顔ぶれが変わるだけで、こんなにも気持ちが変わるものなのか。その上、最高学年として「しつかりしなければ」という思いも隠せない。

そこで、せめて学級の中に入ったら、「居心地がいいクラスにしよう。」と話した。お互いの気持ちに分かり合える、誰かが困っていたり、悩んでいたら一緒に考えることができるといい。「一人はみんなのために、みんなは一人のために」あるんだよ。そんなことを話しながら、全員と握手をしてさよならをした。

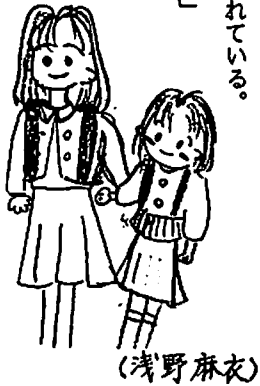
● 四月七日 一年生の世話

今日から一年生も通学班で登校する。小さな手を引きながら、時には荷物を持ってあげながら、一年生の歩行に合わせて歩いている。学校に到着しても、下駄箱まで親切に連れて行く親切な六年生を見ると、我がことのように嬉しく感じられる。そして、各クラスごとに四〜五名ずつ一年生の世話に行くことが、上地小開校以来続けられている。

「あなたたちが一年生の時にしてもらったことを思い出して、お世話をしてあげてね。」

「クイズを出したら、とても喜んで答えてくれたよ。」

「昨日読んだ本の続きを読んで、と言われて嬉しかった。一年生ってかわいいね。」



(浅野麻衣)

● 四月十四日 朝の会・帰りの会のやり方を決めよう

一日の学級生活が楽しくなるような朝の会、一人ひとりが認めてもらえるような帰りの会になるように、上地小学校では各学級で趣向を凝らしている。また、全員が司会をする機会が持てるような輪番性の話し合い活動にも取り組んでいる。六のでもこれまでに、「級訓を決めよう」「二人一役の当番活動を決めよう」と話し合ってきた。今回が三回目である。司会団も少しずつ慣れてきたようだ。

朝の会の変わったメニューは、「ハッピータイム」と称して、週直が出し物を考えたり、読書紹介をする。帰りの会は、「ヒーロー・ヒロイン」で今日一日を振り返る。

「ヒーローは山川君がいいと思います。訳は、牛乳をこぼした時に拭いていたからです。」

そして、企画当番の子が、「ニュースタイム」で、最近のニュースをテレビの画面風にしておもしろおかしく発表している。

● 四月二十五日 やる気の山出る会

話し合い活動も軌道に乗ってきた。「議題は、やる気の出る会社を作ろうである。」このような会社(係活動)は、なくても学級生活は成り立っていくが、あればますます学級が活気づく。授業以外のところで、子供た



ちが意欲的に取り組めるからだ。初めに特活ノートに案を書いてきた時は、ありきたりの会社名が多く堅かったが、何度か考えているうちに自分たちにぴったりの案が出てきた。

私は仲良し会社になった。放課などにみんなが仲良く遊べるようにしたい。それから、私たちが考えた遊びをいやいややるのではなく、楽しいなど思ってくれるような遊びを考えたい。(伊藤 有希)

私はカット・マスケット会社になりました。絵を描くだけでカットを作るんじゃないから、かわいい楽しいものを作ろうと思います。何かはないしよです。私にとって一番やる気の出る係だと思えます。(植村 優子)

僕は歴史専門会社が良かった。なぜかという、何となくお父さんが社会の先生をやっているからつなげていこうかなあと思ったから。それになれてよかった。(長江 脩)



今まではありきたりの係が多くて、あまりやる気が出なかった。だけど、今度のリサイクル係はおもしろそうなので、やる気が出てくるので頑張ってやりたい。(鈴木 春佳)

ハッピー会社になったので、今からいろいろなことを計画していきたい。中でも、みんなが驚くようなこと、やってほしいこと、楽しいことなどを計画してやっていきたい。すぐにでも何かをやりたいと思う。(木村 拓)

それぞれに皆やる気満々である。これからの学級生活が楽しいものに感じられ、わくわくしてくる。一週間に一度くらいは社長会議を開いて、各会社の仕事を発表し、お互いに刺激し合っていると思う。

● 四月二十日 拓君のおわかれ会

木村拓君がわずか一か月で、千葉県に転校することになった。彼が、優しくて皆から好かれる存在であるが故に級友のショックは大きかった。そこで、学級代表を中心におわかれ会の計画を立てた。目的は、「みんなが泣けるような盛り上がるおわ



かれ会にしよう。」である。クラス解体をして良いと思ったことは、昨年度の各クラスの趣向をそれぞれ取り入れることができた。全員が各係のリーダーとなり、木村君の知らないところで準備が進められた。わずか一週間足らずであったが実に良く動いていた。お別れ会前日に教室やゲームの準備をする子、花束や色紙の用意をする子、紙芝居に呼びかけ・・・そして初めの言葉や終わりの言葉までも拓君に語りかけるような感動的なものだった。

おわかれ会の準備の時、うまくいくなど心配した。でも、うまくいってとても嬉しかった。僕は拓君と一緒にサッカーをやっていると、なぜか嬉しくなってしまう。拓君と別れると思うと、ふっと涙が出そうだ。でも、拓君がいると思ってこれからも頑張っていきたい。(星野 慎介)

ボーリングをやっている時は、おわかれ会だと思えないくらい明るく楽しかったのに、拓君の一言と先生の一言の時はとても悲しい気持ちだった。拓君が千葉の学校に行っても、拓君の優しい気持ちを忘れずにいたいと思う。(中瀬直子)

できればこの日は来てほしくなかったけど、いつかは来る以上手を抜かずに頑張りたい。呼びかけのセリフを一生懸命覚えた。木村君はみんなの企画を喜んでくれたかな？教室に入った時、びっくりしているみたいだった。(藤原絵美)

おわかれ会を通して、一人ひとりの良さが目に見え、六の一がひとつになるのを感じた。

拓君 さようなら・・・

みんなで心をひとつにして合奏したい

五年担任 西田 貴子

とっておきのメニュー 「心に響かせて」

「心に響かせて。リコーダーを出して下さい。」

5年2組の朝はこのメニューから始まる。部活動や委員会活動などで少しずつ学校の中心となって活躍し始めている今、忙しく時間に追われて、気持ちが安らいだり心を落ち着かせる時間が減ってきている。一日の中で、ほんの少しでも心にゆとりをもって気持ちが安らぐ時間を作りたい・・・そんな思いで、四月から朝と帰りで毎日続けている。

今リコーダーで、『赤い屋根の家』をクラスでがんばってふいています。私は最初、曲がよく分からなかったけど「心に響かせて」で何回も何回も吹いてみたら結構気持ちよくなりました。まだうまくないけど、みんなと一緒にがんばって『赤い屋根の家』を立派な曲にしたいです。 (半田 千草)

「一月もたつとほとんどの子が上手にふけるようになった。リコーダーの音色も少しずつきれいになってきた。子供たちにきくと「自分が赤い屋根の上のぼってふいている感じ」「屋根の上で雲を見ている様子を思い浮かべている」「太陽が屋根にあたっている様子を浮かべている」など、景色を想像しながらふいている子が半数近くもいた。

「何日も練習すれば音がうまくなるようになるからすきになった。」と言う子もいる。「心に響かせて」は、五年二組にとって、とっておきのメニューなのかも知れない。

まみずは 『きりのきりり』

「心に響かせて」は好きなのに、音楽の授業となると苦手意識が強くなる子がいた。なんとか自信をつけてやる気を出せる方法はないか、いろいろ考えたあげく、アンサンブルオルガンを使ってみようと考えた。

「今日は『きらきら星』をひいてみましょう。」

一年生の時のことを思い出しながら、楽しんで練習し始める。聴き慣れたメロディーなのであつという間に全員ができるようになった。できるようになると演奏することも楽しくて仕方がない様子である。

(オルガンなら自分に合わせて練習できるから、みんなやる気になるかもしれない)

低音がひけるようになるか

五月十九日。校内授業研究で、たくさんの先生方が見に来て下さった。

「今日は『きらきら星』に合う低音をつけて演奏してみよう。」

少し緊張気味の顔もオルガンができることでホッとした様子。左手の音を自分の指と耳で確かめながらグループの子にきいてもらう。初めてやることなので誰もが難しかったが、一番びったり合う低音を見つけた子を選んで、それをグループで練習して合わせてみた。



全山由利

自分たちで「きらきら星」の低音を考えました。美希さんや知香さんに教えてもらったりして、だんだん上手にひけるようになってきました。私はすごくうれしかったです。(中野 幸恵)

アンサンブルオルガンをひく時(やったあ)と思った。低音を考えてひいているとき、先生が「いいよ。」と喋ってくれてうれしかった。私たちがみんなの前でオルガンをひいた時、すごくどきどきしたけど(またやりたい)と思った。(中村 絃子)

低音をつけて演奏すると、今までよりもっと工夫した演奏ができる。

「せっかく練習したんだから、発表会をやろうよ。」という声をきいて、一週間後の「きらきら星」発表会に向けてさらに練習を重ねた。

「きらきら星」 森元美衣

五月二十八日。待ちにまったグループ発表の日。自分のパートの練習以外にグループでの演奏の工夫がうまくまとまるか不安な様子である。

「前奏はゆっくりね。」「低音はホルンがいいよ。」「あわてないようになしよう。」と、それぞれが練習の成果を十分発揮できるように打ち合わせていた。

今から五班の発表を始めます。初めに朗夫君が前奏をひきます。(略)半田さんと桃井さんは演奏の仕方を工夫したのできて下さい。

どのグループも全員が自信を持って発表した。たった数回しかない練習でグループのなかのパートを受け持ち頑張っている姿がたのしかった。

『きらきら星』の発表会がありました。ぼくは両手をひきました。家で何回も練習したかがありました。ちょっと間違えそうになっただけど、うまくひけて良かったです。またこんな授業があったらまた練習して両手をひきたいです。(大盾 聡)

六月二十七日の上地っ子文化祭のコーナーについて、今、学級で話し合っている。子供たちの心の中には、みんなで心をひとつにして合奏したものを聞いてほしいという希望もある。子供たちの希望が実現するように見守っていきたい。



